札幌学院大学バリアフリー委員会の実践にみる障がい学生支援の取り組みの成果と課題(1)

── バリアフリー委員会の経緯と取り組みを中心に ──

The Achivements and Problems in the Progress of the Barrier-Free Comittee at Sapporo Gakuin University

新國三千代

1．はじめに

2009 年 3 月に筆者等は「バリアフリー委員会の 8 年間の実践にみる障がい学生支援の成果と課題」という研究課題で札幌学院大学「研究促進奨励金」（共同研究）に応募し，採択された．研究代表者は新國三千代，共同研究者は，滝沢広忠（臨床心理学科），松川敏道・舛田弘子・藤野友紀（人間科学科），西真木子（英語英米文学科），皆川雅章・大國充彦（社会情報学科）である．

本稿(1)では，まず本学のバリアフリー委員会のこれまでの経緯と障がい学生支援の取り組みを中心に成果と課題を概観する．次稿以降で，バリアフリー委員会が取り組んできた障がい学生支援について，個別の事例を取り上げながら支援の内容と方法および課題についてまとめる予定である．

なお，以前本学では聴覚に〝障がい〟を抱える学生を「重度難聴学生」と呼んでいたが，最近バリアフリー委員会では，「聴覚障がい学生」という表記を用いている．学外の各種機関との関わりの中で様々な議論(注1)を経て，「障害」「障碍」ではなく，「障がい」という表記を用いることになり，これに伴い，「重度難聴学生」についても「聴覚障がい学生」と表すようになった．本稿には，「重度難聴学生」と「聴覚障がい学生」の二つの表記が出てくるが，このような経緯から，その時使用されていた用語を書き変えずにそのまま使用している．また，混乱を避けるために本学以外の機関で使用している表記についてはそこで用いられている表記（例えば，日本学生支援機構では「障害学生支援」を用いる）をそのまま用いることにする．

参考まで，1999 年以降に本学に在籍した（する）障がい学生在籍数を表 1 に示す．1999 年以前にも該当する学生が在籍していたことを断っておく．

2．バリアフリー委員会の沿革と取り組み

2.1　学生によるボランティア団体の立ち上げ

本学に最初に重度難聴学生が在籍（人間科学科）したのは 1990 年頃と聞く．その時は周りの学生達が自発的にボランティア組織（後に「手話サークル」に発展）を作り学生を支援したという．その後，1999 年度法学部に重度難聴学生が入学した．当初は大学側で事情をよく把握していなかったこともあり，自習用の参考書を紹介したり，ノートを見せてあげられる学生を紹介するといった不十分な対応しか行われていなかった．そのため単位の取得が困難であったという．このような状況を知った藤懸久明さん（当時大学院法学研究

NIKKUNI Michiyo　札幌学院大学人文学部こども発達学科

表１　1999 年度～2009 年度の障がい学生在籍数※

年度	障がい内容						合計人数
	上下肢機能障がい者数			視覚障がい	聴覚障がい	その他	
	車椅子使用	補助具使用	自力歩行				
1999	3	1	1		1		6
2000	4	1			1		6
2001	3	1	2		2		8
2002	4		1		2		7
2003	7		1		1		9
2004	10		2		3		15
2005	10		3	1	5	1	20
2006	8	1	2	2	9	5	27
2007	5	2	3	1	11	5	27
2008	2	2	1	1	11	9	26
2009	4	2	3	2	9	6	26

※保健センターが入学時の申し出や入学後の健康調査回答によって把握した数字である．

科１年）は，筑波大学が作成した『聴覚障害学生のサポートに関するガイドブック』(筑波大学第二学群人間学類編集，1998 年 3 月発行)[1] を入手し，ノートテイカーの養成を行いながら，講義保障（ノートテイク）の取り組みを開始した．ノートテイクとは，授業中の音声情報をノートや用紙に文字で書き記して重度難聴学生に伝える仕事で，これを行う人をノートテイカーと呼ぶ(図１)．ノートテイカーは，2 人一組で難聴学生の両隣に座り，ノートを見やすい位置に置いて，10～15 分交代でテイクを行う．講義メモとは異なり，先生が話すプリントや資料に記載されていない事項や余談，授業に参加している学生達の質問なども文字に書き起こす．先生の雑談や学生からの質問が受講生の関心を引き，勉強を始めるきっかけとなることもあるため，授業中のあらゆる音声情報を文字にするのである．情報保障とは，このように重度難聴学生が他の学生と同様に〝授業に参加できる〟ことを保障することを言う．実際には，手書き速度を発話速度に合わせることは難しいため，話の内容を要約する．つまり，ノートテイクは要約力が必要とされる高度な技術で，養成講座などで練習を積み，スキルを身につけた者が行うことになる．

図１　ノートテイカー

藤懸さんは 2000 年度に志のある数名（５名と聞いている）の学生と情報保障ボランティア団体を設立する．その年，重度難聴学生はかなりの単位を取得することができ，その成果は顕著なものがあったと言う．その後，この学生は優秀な成績で大学を卒業した．当時法学部の教務委員であった南隅基秀先生（現東海大学法科大学院教授）は，藤懸さんや重度難聴学生から相談を受けるようになり，それがきっかけでバリアフリー委員会の設立に関わることになる．因みに，筆者が支援に関わるようになったのは，当時所属していた社会情報学部に重度難聴学生が入学された

2001 年度からである．

2.2　2001 年 12 月「バリアフリー委員会」発足

これまで学生ボランティア団体を組織して熱心に活動していた藤懸さん（当時大学院 2 年）が翌年修了を迎えるため，南隅先生は学生や関わりのある教職員と共に 2001 年 12 月にバリアフリー委員会を立ち上げる．委員長は南隅先生であったが，自らを世話人と称し，「学生も教職員も全員平等な形で障がい学生をサポートする組織」と位置付けた．社会情報学部にも重度難聴学生が 1 名在籍していたことから，筆者も教務に関わる数名の教職員と参加することになる．

実は，当時全学教務委員会や大学協議会などでも重度難聴学生の対応について検討していたが，間に合わないと危惧した南隅先生は学生と教職員に呼びかけて「バリアフリー委員会」という自主的な組織を立ち上げたのである．毎日進行する大学教育の現場で，教員や職員が対応しなければならない様々な課題を抱えていたためである．このとき参考にしたのが，故高橋渉先生から紹介された道教育大函館校の取り組み[2] である．高橋渉先生は，〝道教育大函館校では，聴覚障碍学生の受け入れを巡る議論の過程からバリアフリー委員会を設置し，ノートテイカーの養成から手話の講義の新設など，地域の方々の協力を得ながら受け入れの環境を整えていく．学生がボランティアとして参加しやすい条件を整え，支え手としての学生の資質の向上に向けた取り組みもしている．大変参考になる実践だ．〟と述べている[3]．これが本学のバリアフリー委員会の活動の方向性を示す礎になる．当面は，重度難聴学生に対する対応に取り組むが，将来的には障がいを抱える学生一般に対応する活動に拡大していくことを目標にした．こうして発足したバリアフリー委員会はいわゆる正規の大学の委員会組織ではなかったが，大学はこれに理解を示し，翌年度「バリアフリー委員会」に予算を付ける．設立の経緯については，『札幌学院大学評論』第 27 号（2003 年度発行）の「特集／分けない社会へのアプローチ　巻頭座談会「バリア」なき大学へ」[3] の中で南隅，高橋両氏が，詳しく説明している．

この年，社会情報学部に所属していた筆者は，重度難聴学生のノートテイカーが不足しているので学生に協力を呼び掛けて欲しいという依頼を受けた．情報分野の専門ゼミを担当していた筆者は，パソコンを活用してノートテイクができるのではないかと考え，専門ゼミで有志を募って（社情 3 年山口渉，藤田拓也，吉田将和），パソコンを使ったノートテイクツールの開発プロジェクトを開始した．前期はノートテイクの勉強と実践を兼ねてテイクに入り，後期にパソコンを用いたツールを検討することにした．試行錯誤しながらツールを検討していたとき，藤懸さんから IPtalk（栗田茂明氏作成[4]）という便利なフリーソフトがあることを聞いた．使ってみると大変な優れものであることが分かり，タッチタイピングが速いゼミ生に実験的に講義で試用してもらった．これを体験した重度難聴学生は，「情報がこんなにもたくさんあふれていることに驚いた！　リアルタイムで少しはみんなについて行けた感じがした．ノートテイクより情報量が多く，画面を読むのと板書の書き取りの両立は大変だった．」と感想を寄せてきた．これを用いることで講義の音声情報を実況中継しているかのように文字情報に変換することができたのである．プロジェクトの取り組みについては，『札幌学院大学評論』第 25 号に新國が「リアルな講義を伝えたい！　難聴学生へのパソコンによる講義支援」[5] と題して紹介している．プロジェクトに参加した学生達は，重度難聴学生の感想に手応えを感じ，「ここまで講義を再現できれば十分だ．これはかなり有効な支援手段になる」

という講義担当者の言葉にも励まされ,「自分たちが役に立っていることが嬉しかった」とゼミで発表している．彼らはテイカーを育てるために手引き書を作り，これ以降，バリアフリー委員会のメンバとして活躍することになる．

本学ではパソコンを活用したノートテイクを当初パソコン通訳と呼んでいたが，途中からPCテイクと呼ぶようになる．ここではPCテイクを用いる．PCテイクでは，難聴学生の前に置かれたパソコンのモニター画面に，LANで接続したPCのキーボードから授業で発される音声情報を文字で入力して，即座にモニター画面に表示する(図２)．２人が交代で行うが，タッチタイピングが速い学生であれば，音声情報をほぼリアルタイムで伝えることができる．初めてPCテイクを見た難聴学生はその情報量に驚く．その場で文字情報を読み取って理解することが困難な場合もあるため，印刷したものを授業終了時に渡していた．難聴学生はそれを読んで自分のノートを作成するなどして復習する．PCテイクの利点は，ノートテイクで必要とされる要約力という高度なスキルをそれ程必要としないことである．ある程度タッチタイピングができればほぼ授業中の音声情報をそのまま文字に変換することができる．従って，情報保障の質という点から考えると，ノートテイクよりPCテイクの方が個人差が小さい．学習機能や専門用語の辞書登録を使うことでさらに質の高い情報保障が行える．この後，本学の情報保障ではノートテイクとPCテイクが使用されるようになる．

図２　PCテイク

2.3　2002年度：重度難聴学生支援の組織的活動の基礎作り

2002年からは，重度難聴学生が在籍する法学部と社会情報学部からバリアフリー委員会の学生リーダーを各１名（法学部４年杉木奈津子，社情４年山口渉）出し，副リーダー３名（人文英語英米３年吉田徹，社情３年石崎智久，法３年佐々木雄亮）の体制で重度難聴学生の支援を行うことになる．バリアフリー委員会に参加する教職員は，職員４名(法１，社情３)，教員５名(法１，社情２，人文２)，学生は54名(重度難聴学生２名含む,資料１)と増えた.テイカー募集のポスターを制作し，新学期のガイダンスで学生達が手分けしてテイカー募集の呼び掛けを行った結果，33名の学生が新たに加入したのである．４月に商学部二部の自治会が使用していたＦ館５階の自治会室Ｆ507を譲り受けることになり，それ以降バリアフリー委員会の部屋として使用することになる．

この年は,重度難聴学生２名の29科目にテイカーを配置する.前期は13科目および夏期集中講義４科目に29名のテイカーが延べ264コマ入り，後期は12科目に29名のテイカーが223コマ入る（資料２）．ノートテイカーは17名，PCテイカーは19名(内７名は社情，12名は他学部）であった．テイカーの配置では，教員がリーダー，副リーダーと相談しながらコーディネーターとしての役割を果たした.テイカーの空き時間の把握と配置，欠員の補充，被テイカーの都合による欠席や遅刻の対応など目に見えない負担が多い仕事である．

この年,全学教務委員会の予算として,ノートテイカー消耗品(３万円)，ノートテイカー

奨励金（1コマ1,000円の図書券，前期・後期50万円相当）の計103万円が付く（資料3）．また，PCテイク用のノートパソコンを大学から貸与され，商学部二部自治会からもノートパソコン（20万円）の寄贈があった．また，法学部自治会から10万円の援助金を受けた．

1999年に入学した重度難聴学生は9月に就職が内定し，2003年3月に優秀な成績で卒業した．卒業式には手話通訳を大学側で付けた．

バリアフリー委員会が本格的にスタートしたこの年は委員会の組織的活動の基礎が築かれた年でもある．ここで確認された事項は下記の通りである．

1）バリアフリー委員会の活動方針

・活動の継続性を考えて特定の個人に依存しない．

・将来的には大学として支援に取り組むことをめざす．

2）バリアフリー委員会の取り組み

・年度末に学生・教職員合同会議を開き，次年度の計画と準備を行う．

・テイカーの募集活動を行う．ガイダンスでのアピール，ポスター，ちらし作成配布など．

・重度難聴学生が履修する科目の授業担当者に配慮の要請を行なう．

・学期始めにテイカー養成講習会を開催する．講師は，先輩テイカーが務める．

・テイカーの空き時間の把握と重度難聴学生が希望する履修科目にテイカーの配置を行う．

・テイカーを集めたミーティングを開き，交流を図るとともに技術の向上を図る．

・重度難聴学生とテイカーが交流を図り，理解を深めるとともに情報交換をする．

・重度難聴学生やテイカーのコンサルティングを行う．

・ホームページ（以下HP）を作成し，更新する．

・学外講師を招いて講習会や手話教室（重度難聴学生2名が講師）を開催する．

・各種ルールの作成

ノート／パソコンテイクの基本的ルール，予算執行のルールなどを順次整備する．

3）役割分担

学生と教員，職員がそれぞれ出来る範囲でカバーし合いながらコーディネーターとしての仕事を分担する．

・教員の役割

テイカー募集（授業，学部HP，ポスター作成），パソコンテイカーの養成（新國専門ゼミを中心に），テイカー配置のサポート，テイカーと重度難聴学生のコンサルティング（学習や学生生活の相談にのる），テイクの基本ルールの作成，授業担当全教員に配慮要請文配布，大学当局との連携・交渉，バリアフリー委員会の広報活動（バリアフリー委員会の報告を教職員に配布）

・職員の役割

テイカー募集，テイカー応募窓口，重度難聴学生への緊急連絡（学生課，管財課，教務課の職員が対応），重度難聴学生およびテイカーの相談にのる，会計処理

・学生の役割

テイカー募集，テイカー養成（先輩が初心者にノウハウを伝授），テイカー配置（リーダーを中心に），重度難聴学生の相談相手，学内外ボランティア団体や他大学の重度難聴学生やボランティア団体との交流，自治会からの予算獲得とその執行，学生向けの広報活動，交流会の企画

・学生OBの役割

顧問としてバリアフリー委員会全体を支援する．

4）バリアフリー委員会内の連絡体制

連絡はメール（携帯メール），HP，掲示

板を利用して下記のように行う．

(1) 委員会メンバ全員への連絡やテイカーへの連絡は，バリアフリー委員会のリーダーが行う．

(2) テイクに関する連絡（テイカーの変更や欠席，休講や講義室等の変更）は，配置されたテイカーおよび重度難聴学生間で携帯メールで取り合う．

5）情報の管理

教員と学生リーダーはバリアフリー委員会メンバの名簿の管理やテイカー・被テイカーの携帯メールアドレス等の個人情報の管理に責任をもつ．

6）テイク用パソコン，部屋Ｅ 507 の保管庫等の鍵の管理

バリアフリー委員会の教員およびリーダーが責任を持って行う．

7）将来の方向

当面は重度難聴学生に対応することを目的とするが，将来は障がいを持つ学生一般に対応する方向に活動を拡大する．

なお，緊急時の重度難聴学生への連絡対応については事務局と申し合わせを行い，４月から，管財課・教務課・学生課間で専任職員の通常の勤務時間帯にメールで連絡をとることになった．

社会情報学部の学生リーダーであった山口渉さんは，札幌学院大学学園広報（2003 年２月 21 日発行）に「難聴学生に対する講義保障ボランティア活動 ── ノートテイクとパソコン通訳 ──」と題してこの年の学生達の取り組を紹介している[6]．また，この年から，後輩と情報を共有するために HP にバリアフリー委員会の取り組みをできるだけ多く掲載するようにした．

2.4 2003 年度：バリアフリー委員会の発展と苦悩

この年は学生達の強い後押しで，リーダーを宮町悦信（社情２年），副リーダーを長谷川祐也（法２年）の２年生が務めることになる．前年度築かれた体制をもとに学生達の取り組みが大きく進展する．テイカー養成以外に，学習統括部（部長：人文１年田村綾耶），交流部（部長：法２年長谷川祐也兼務），CAR 部（部長：人文英語英米３年吉田徹）の３つの部門を作り，手話勉強会の隔週開催，交流部による他大学の手話サークルとの連携・交流，CAR 部による車椅子との交換を目的としたアルミ缶回収活動が始まる．CAR は学生達の造語で，〝アルミ缶（C），集（A）める，リ（R）ングプルも〟からとった略語だという．

この年，学生達は大分で開催された「全国聾学生の集い」や「全道聾唖者大会」，「北海道重複障害研究大会」（旭川）など様々な講演会・ワークショップに積極的に参加する．参加費や旅費は自治会からの援助金や自費を当てたが，翌年からは，参加費と旅費が大学予算で支給されることになる．バリアフリー委員会の HP も社会情報学部の学生の協力で作業が進み，学生達の活動内容を細かに掲載し，充実したものになる．大学の HP からもリンクが張られた[7]．

大学の支援も前年に引き続きパソコン１台が貸与され，さらに進んだ．Ｆ館の部屋から無線 LAN の利用も可能になる．また，前年から要望をあげていたテイカーの奨励金が図書券から１コマ 1,000 円に変わった．翌年，この奨励金を巡って，バリアフリー委員会の中で議論が起きることになる．

なお，この年初めて北星学園大学からノートテイカーを希望する２名の学生が本学のテイクに入る．難聴学生が在籍していなかったことから本学での実践体験を申し出てきたためで，本学の基準で奨励金を支払った．

この年のバリアフリー委員会のメンバは前年度より増え，学生 69 名（資料１），教職員６名，計 75 名となる．一方，在籍する重度難聴学生は１名だけで，テイカーを配置する科目数は前年度に比べて大幅に減った（資料

2）．にもかかわらず，リーダー，副リーダーは大きな悩みを抱えることになる．ノートテイクやパソコンテイクに携わる学生数が限られていたこともあって，テイクに入れない学生達との関係が疎遠になり，委員会が主催する会合にも来なくなる学生が出てきたというのである．

私たち教員は11月にリーダーから次のようなメールを受け取る．

〝一つ一つの活動を細かく見ていくと，悩みは絶えません．委員会への登録者数は70名を超えてはいますが，実際に積極的に参加してくれる人を考えると，片手で数えられる人数になってしまいます．「ただノートテイクだけがやりたい！」こういう人もいます．確かに目的意識としてはそれで十分かもしれませんが，聾学生と関わっていくには，それだけでは不十分だと私は感じました．やはり聾者の第一言語である〝手話〟を学んでほしいと強く感じています．…(略)…「聾者とは何か？，聾文化とは？」等，少しでも興味を持っていただくため色々な機会（講演会・研修会）を提供しているつもりではありますが，参加するのはいつも同じメンバです．…（略）…今年の組織体系はまだ未完成であったと強く感じています．それにより，色々な不都合・不具合が生じたため，来期からは組織体系を整えて，全く新しいバリアフリー委員会を作っていきたいと考えております．〟

私たち教員は，支援については特に支障はでていなかったので，学生達を見守りながら大学としての支援体制のあり方を探っていくことにする．この年のリーダーと副リーダーの苦悩は大変なものであったと聞くが，この経験がバリアフリー委員会の地歩を固めることになる．リーダーの宮町さんは，〝バリアが未だに，大学・社会に数え切れない程残っているが為に，障がいを持った学生が情報を得ることや，社会参加することを阻まれているという現状を理性的に捉え「バリア無き社会」を目指し，「障がいを持った学生とともに諸問題について取り組み，ともに歩む」という考えを持った学生が集まり，日々活動すべきである〟という考えに至る．こうして，理解・啓発を念頭に置きながら，翌年バリアフリー委員会の新たな体制作りに着手する．副リーダーの長谷川さんは，次のように述懐する．

〝スタート時の学生･教職員合同会議で，高橋渉先生から，「聴覚障がいだけではなく，『バリアフリー』と言うのならすべての障害種に対応できなければ…云々」という趣旨のコメントをいただいき，宮町リーダーと他分野の講演会や勉強会にも積極的に参加していこうと話し合い，学外で開催される様々な講演会や学習会に積極的に委員会の学生を誘いました．これは，関心の幅を広げると同時に，テイクに入ることのできない学生をつなぎとめ，興味を持ち続けてもらうための方策でもありました．その一方で，外部への働きかけよりも内部の充実が大事じゃないかと話し合った．それが翌年の5つの部の設立や車いす学生への支援につながった．また，各部に所属することを条件に学生の募集を行なうことにした．このような活動に積極的ではない学生に対するアプローチは，毎年の課題だと思います．ただ，被テイカーが増え，車いす介助も増えた今，これも少しずつなくなっている気がします．昔は，「テイクをしに来ているのに，筆記代行や車椅子介助はできません」という学生もいたが，活動への参加意識が薄いメンバに対しては，それぞれの得意分野，例えば，PCテイク，ノートテイク，もしくはHP作成といったことを極めてもらうことが大事だと私は考えました．昔のK君なんかはそうでしたよね．人付き合いはあまり得意じゃないけど，PCに関しては極めているプロフェッショナルでした．宮町リーダーには外部への発信を，僕は内部の統括と把握をというように，業務分担ができていたと思います．それ以降，すべての障害に対してのサポー

トを行なうことが浸透し始めた．学生達がどの支援にも積極的に参加してくれているというのが今の状況ではないでしょうか．″（長谷川裕也 2009 年春談，因みに，当時副リーダーであった長谷川さんは 2009 年度の教員採用試験で，特別支援学校高等部の公民（政治経済）に合格し，2010 年度から教壇に立つことになっている．）

参考まで，バリアフリー委員会の HP の「委員会概要」の「経緯」に掲載されている，2003 年度のリーダーの総括を紹介する（この総括は後に再編集されたため，〝障がい″という言葉が散見する）．

〝この年はバリアフリー委員会としての活動が躍進した年です．…（省略）…昨今ではよく耳にする「バリアフリー」ですが，一体これは何か？　バリアフリーとは，障がいのある人が社会生活をしていく上で障壁（バリア）となるものを除去するという意味で使われます．ここで言うバリアとは，一般的に「物理的・制度的・文化，情報面・意識上」のバリアという 4 つを対象に用いられます．

高橋渉先生の声かけにより，バリアフリー委員会の原点に戻らなければならないと感じ，バリアフリー委員会では先に述べたバリアが未だに，大学・社会に数え切れない程残っているが為に，障がいを持った学生が情報を得ることや，社会参加することを阻まれているという現状を理性的に捉え「バリア無き社会」を目指し，「障がいを持った学生とともに諸問題について取り組み，ともに歩む」という考えを持った学生が集まり，日々活動すべきであると考えました．

聴覚に障がいを持った学生だけではなく，肢体不自由学生にも，これから入学してくるかもしれない様々な障害を持った学生が入学してきたときのための準備・サポートを確立していかなければなりません．″

この年のリーダー達は，悩みぬく中で，先達の知恵を仰ぎ，自らも勉強しながら，話し合いを通して解を見出していった．彼らはかなり激しい議論をしたと聞いているが，学生達の真摯な姿勢，支柱となるものを真剣に追い求める努力，そして，彼らの企画力には驚嘆する．バリアフリー委員会のメンバであった障害児教育を専門とされる故高橋渉先生の助言も大きかったことは言うまでもないが，重度難聴学生の工藤努さんの友好的な姿勢も助けになった．工藤努さんは，この年『札幌学院大学評論』第 27 号の「特集／分けない社会へのアプローチ」に「障害に負けるな」[(8)] という原稿を寄せている．

2.5　2004 年度：大きな躍進と学生組織の基礎づくり

2004 年度は大きく躍進した年である．新たにテイクを必要とする学生 3 名（社情）が入学し，聴覚障がい学生が 4 名になる．また，筆記困難な車椅子の学生が 1 名入学した．障がい学生と支援学生は 75 名，教務課および学生課の職員，そして教員を合わせるとバリアフリー委員会のメンバは 86 名になる（資料 1）．テイクは，前期は 31 科目，配置学生総数は 70 名（実数は 64 名），後期は 25 科目，配置学生総数は 58 名（実数は 33 名）で，合計 56 科目に配置された（資料 2）．委員会の予算も消耗品予算の増額と手話勉強会予算，各種講演会・ワークショップへの参加費など前年度の約 1.5 倍が認められた（資料 3）．残念なことであるが，バリアフリー委員会の世話人代表であった南隅先生が 4 月から東海大学法科大学院に移ることになり，世話人代表を新國（当時社会情報学部）が引き継ぐことになる．

この年，バリアフリー委員会の学生組織は編成部，学習部，広報部，交流部，CAR 部の 5 つの部からなる新体制となった．前年に引き続きリーダーは宮町悦信（社情 3 年），副リーダーは長谷川祐也（法 3 年）と竹田圭吾（社情 2 年）が務める．編成部部長は工藤努（社

情３年）でテイカー養成とテイカー配置を担当した．学習部部長は田村綾耶（人文臨床２年）で手話学習会を企画開催した．広報部部長は片山喜博（人文英語英米２年）で，HP の更新，ポスター・ちらし制作，通信・文集発行など広報全般を担当した．交流部部長は副リーダーの長谷川祐也が兼務し，学内外の交流の企画と運営を行った．CAR 部部長は副リーダーの竹田圭吾（社情２年）が兼務した．リーダー，副リーダーたちは各部の活動状況や企画，問題等について意見を交換する部長会議を定期的に開いて，大人数のバリアフリー委員会を部単位でまとめていくことになる．

この年から，広報部はバリアフリー委員会の取り組みを学生や教職員に広く伝えるために通信の発行を開始する（５回発行）．また，その年の活動や資料をまとめた分厚い報告書「2004 年度札幌学院大学バリアフリー委員会論文集」を年度末に発行することになる[9]．更に新たな取り組みとして，肢体不自由学生との交流を積極的に図り，筆記代行（有償ボランティア）や道具の準備・後片付け，登下校時の車椅子介助（無償ボランティア）などを始める．

交流部の活動も活発になり，新入生歓迎会や卒業祝賀会，他大学も参加するスポーツ交流会（身体不自由者が参加できる企画，図３）が大々的に行われ，これ以降毎年の恒例行事となる．

2004 年度は，教職員にとっても〝学生と教職員のコラボレーション〟の成果を実感する年であった．筆者は４月 13 日付けで学長より「札幌学院大学における身体に障がいのある学生の受け入れについて」諮問を受け，受入の現状と基本的理念および当面必要な対策等をまとめて答申した．この答申はバリアフリー委員会の構成メンバである教職員（就職対策については，山本就職部長が寄稿）および学生の計 10 名で執筆するという画期的な答申であった．

図３　スポーツ交流会

意見書の作成に関わった学生と教職員は次の通りである．

学生：リーダー：宮町悦信（社情３年），副リーダー：長谷川祐也（法３年），竹田圭吾（社情２年）

職員：井上寿枝・久保真志・榎本愛（教務課），松本賢彦（学生課）

教員：新國三千代（社情），松川敏道（人文），山本純（就職部長）

答申の目次は次の通りである（括弧内は執筆者）．

Ⅰ　現状把握

１．身体に障がいのある学生の受け入れ状況（教務課久保・榎本）

２．身体に障がいのある学生の学生生活と本学の施設（学生課松本，学生リーダー宮町）

３．本学における支援態勢の現状（新國）

II 受け入れるに当たっての基本的理念（松川）

III 今後の対策

1．受け入れに当たっての留意事項（新國）

2．施設上改善が必要な箇所（学生課松本，学生リーダー宮町）

3．日常の支援態勢に関して

a．委員会の位置づけ（松川，教務課井上，新國）

b．学生ボランティア募集（新國）

c．大学事務との関係（教務課井上，新國）

d．予算上の配慮など（新國）

e．高等養護学校との連携（松川）

f．その他必要措置等（新國）

4．就職対策（山本就職部長）

答申後，私達は大変貴重な体験をすることになる．学長はこの答申で挙げた要望に理解を示し，出来るところから順次整備・改善を実行し，本学のバリアフリー化が一挙に進んだ．筆者等は答申というものは実現するものなのだと再認識することになる．学生達は当時の学生課職員の松本賢彦と大学構内を隈無く歩き，改善点や問題点を洗い出し，要求をまとめあげた．裏付けのある，説得力のある要望であれば実現するんだという思いが学生達の間に広がった．筆者等はこのとき大学側（学長）が示した理解に，本学の理念〝構成員で創りあげる大学〟は今も生きていると感じ，勇気付けられた．

要求には，細かなことから大規模なものまで様々ある．全ての車椅子用トイレに棚を設置する，図書館に車椅子用トイレを設置する，車椅子トイレの入口に「男女」が利用できることが分かる図柄を入れる，ノートパソコンでノートをとっている学生のために長時間バッテリーを貸し出す，友人達とも語らえるような車椅子学生が休憩するスペースを作る（畳の休憩コーナーとして実現），第2キャンパスの総合体育施設の建設では，車椅子の学生も自力で移動／利用できるように設計上の配慮をするといったことが実現した．その後も，3号館の入り口にスロープを付ける，3号館のドアを自動ドアにするなどバリアフリー化が進む．図書館では「身体に障がいを持つ学生利用者への対応マニュアル（車椅子利用者編）」を作成したが，これに対し図書館の出入り口のドアと各閲覧室のドアを引き戸にして欲しいという要望書が車椅子学生一同から出されたが，構造上の問題から実現していない．

この年，テイカーの奨励金を巡って学生達の間で何度か話し合いがもたれた．学生達が情報保障ボランティア団体を設立した当初はテイクは無償ボランティアであった．その後，大学から図書券，次に奨励金が支給されるようになり，有償ボランティアとなった．これについて，「ボランティアなのに有償なのはおかしい」，「奨励金がもらえるということで，アルバイト感覚でテイクをされても困る」，「テイクは聴覚障がい学生の耳の代わりをするものなので，有償ボランティアは当然」，「無償ボランティアということでスキルアップの努力を怠ったり，遅刻をするというようなことがあるとまずい」，「テイクは聴覚障がい学生の情報保障の手段なので，プロとまでは言わないが，セミプロ並みのスキルを前提に奨励金が支給されている．従って，遅刻をしたり，無断欠席などは論外」等々，教職員も含め様々な意見が出された．実際には，テイクは大変な仕事なのでアルバイト感覚でやっている学生などいなかった．テイク講習会だけでは不十分と感じた学生は，自宅でTVのニュースを聞きながらノートテイクの練習をするなどスキルアップにも努めていた．結局は有償ボランティアということで落ち着く．数年後のバリアフリー委員会の説明会では，テイクの奨励金について，「これには二つの意味がある．一つはテイクをしてくれてありが

とうという意味，もう一つはテイクは仕事なのでスキルを身につけてしっかりとやって欲しいという意味である.」と話していた．その後この考え方が浸透した.学生達で話し合い，率直に議論をするというあり方は後輩達にも良い影響を与えている.

この年は嬉しいニュースや新たな企画が続く年であった.

7月に学生リーダーの宮町悦信さんが,「北海道NPO越智基金助成金」に応募して見事採択され，活動資金を獲得した（大学関係の採択はこれのみであった）．1月には，文泉会事業として毎年行っている「課外活動優秀団体・個人表彰」で，宮町リーダーの活躍が認められ，課外活動優秀学生の一人に選ばれた（図4）.

12月21日には全学教務委員会，人文学会幹事，バリアフリー委員会の共催で「授業の工夫・改善に関するシンポジウム ── 身体に障がいを有する学生として本学で学ぶ」[10] を開催し，バリアフリー委員会の5名の障がい学生と支援学生2名がパネリストとして招待されて意見を述べた(図5)．シンポジウムには学生，教職員も参加し，大変有意義な意見交換の場となった.

図4　宮町リーダー

2.6　2005年度：5周年を迎える

大変残念なことであるが，4月上旬にバリアフリー委員会を見守り続けてこられた高橋渉先生が御逝去された．高橋渉先生はバリアフリー委員会の多くの学生から慕われ，尊敬されていた．高橋渉先生の講義に感銘を受けて特別支援学校の先生を目指す学生が増え，採用試験に受かって教壇に立つ者も現れた．人間的な触れ合いが学生達の中で実を結び出したと感じている.

この年，テイクを希望する聴覚障がい学生は，1名が韓国に留学中のため卒業した科目等履修生を含めて5名になった．その他，筆記代行を要望する学生2名（手が不自由な学生1名，強度弱視学生1名）が在籍した．前年はテイクを希望する聴覚障がい学生は3名であったが，5名になったことで支援学生の募集やテイカーの養成だけではなく，テイカーの配置やそれに関わる諸々の仕事が一挙に増えた．テイカー不足に悩まされることにもなる．以前，支援学生が多く，テイカーをやりたくても入れないという状況があったことが嘘のようである．この年，テイカーの養成と配置等を担当する部を2つに分けることになる．バリアフリー委員会の学生は111名（資料1）で教職員を合わせると120名を超える．リーダーは竹田圭吾(社情3年)，副リー

図5　「身体に障がいを有する学生として本学で学ぶ」シンポジウム

ダーは片山喜博(人文英語英米３年)，田村綾耶(人文臨床３年)，テイカー養成部部長は小野寺功（法２年)，近藤美希（社情２年)，テイカー編成部部長は夕向智博(人文人間２年)でテイカー配置を担当した．学習部部長は白江香澄・平留美・斉藤広子（人文人間２年)，広報部部長は藤村浩似(社情２年)，交流部部長は青木雄大（社情２年)，CAR 部部長は三好正孝（社情２年）である．部長の数が一挙に増えたことに大変さを伺い知ることができる．

テイカーを配置した講義のコマ数は，前期が 928 コマ（被テイカー７名，テイカー実数 52 名)，後期が 861 コマ(被テイカー６名，テイカー実数 44 名)，合計 1,789 コマになる(資料２)．二人一組でテイクに入るので，一人のテイカーが複数の科目を担当することになり，２コマ連続してテイクに入らないなど規則の見直しが行われた．また，休み時間が 10 分と短く，テイカーが道具を取りに行っていると授業に間に合わないため，テイクを受ける学生は，必要な道具(ノート，ペン，PC2 台，ケーブル類，バッテリーなど）を自分で講義室に持参して，テイカーが来るまでに準備をしておくことになった．

テイカーおよび聴覚障がい学生に対するヒアリングとアンケート調査から，みんな真面目にそれぞれの役割をよく果たしていることが分かった．しかし，わずかではあるがテイカーや被テイカーのなかに遅刻や無断欠席をする学生がいることが判明した．部長や教員が個別に注意するなどして対応した．

ノートテイクと PC テイクのテイカー養成では，新入生対象の講習会を新学期始めに数回開催し，重度難聴についての理解，ノートテイクと PC テイクの実技指導を行う．さらに，スキルアップ講習会を学期開始時１～２ヶ月間は毎週１回開催し，ノートテイクと PC テイクの実技を指導する．１月 28 日に本学において「重度難聴学生達と共に学ぶ環境の構築を目指して」と称する講演会（全学教務委員会主催)とノートテイク養成講習会(バリアフリー委員会主催）を開催した．当日の講演や講習会は録画してバリアフリー委員会の HP に掲載している．この頃から，オープンキャンパスでテイクの支援体験が行われるようになる．また，この年から学外から講師を招いて週１回手話勉強会を開催するようになる．20 回手話勉強会が開催されたが，毎回 40 名以上が参加し，盛況であった．手話は，重度聴覚障がい学生との日常的な意志疎通やフィールドに出かけるなど授業中にノートやパソコンが使えない場合に使用している．

11 月５日(土)，５周年記念講演会「障がいと世界平和について考える」を長崎県ろうあ原爆被爆者である山崎栄子さんをお迎えして SGU ホールで開催した．前年度リーダーの宮町さんが，NHK のテレビで山崎栄子さんが手話で被爆体験を講演されている姿を見て大変感激し，５周年行事として企画したもので，この年のリーダー，副リーダーが中心となって実現した．講師の依頼から運営全てを学生達だけの手で行った．本学の学生達が PC テイカーを務めた(図６)．参加者は 147 名で成功裡に終わった[11]．

７月 27 日（水）の北海道新聞朝刊の「学生リポーター走る　キャンパス最前線」に長谷川祐也さん（法４年）のバリアフリー委員会を紹介するリポート記事[12] が掲載され，好評

図６　リアルタイムに実況中継

であった．また，11 月 4 日発行の『札幌学院大学学園広報』第 92 号に韓国の東國大学に留学中であった沖野友輔さん（社情 3 年）の記事[13] が掲載された．

この年からバリアフリー委員会の卒業祝賀会（図 7）が開催されるようになった．工藤努さんは卒業生として，後輩達に次のような感動的な言葉を残している．

〝… 4 年間色々な思い出がコップ 1 杯になるほどたくさんつまった本学と別れるのが寂しくてたまりません．もっと本学にいたいというのが本音です．入学する前までには，大学生活などが楽しみだという気持ちはなかったのですが，実際に入学してみると，嘘のように大学生活が毎日のように楽しくて，また聴覚障害の私を理解してくださる人々が多くいらっしゃってくれて本当に感謝で一杯でありました．私のような障害者も健常者と平等に講義を受けさせてくださり，また健常者と同じ人間として，喜び，学び，楽しさ，怒りなどを素直に分かち合うことのできた本学と出会って大変満足しております．

皆さんとは，ノートテイクまたは PC 通訳活動を通じて知り合うことができました．これは私にとって貴重な出会いであったと思います．活動を維持していくなかで，お互いに得るものがあったと思うし，人間的に何らかの形でプラスに成長していくことができた気がするからです．こうして自分発見ができたし，何より皆さんと出会えて本当によかったです．私たちが今まで築いてきたものを，後輩たちやバリアフリー委員会が継承してくれるものと確信しています．また，皆さんが卒業する時期を迎えたとき,「バリアフリー委員会に入ってよかった」といえるような委員会をつくりあげてほしいものです．障害をもった学生のためにサポートするだけではなく，障害をもった学生と「共に考え，共に取り組み，共に生きる」ということができるような団体を目指してほしいです．そのほうが，お互い大きく成長することができるのではないかと思っています．〞

図 7　卒業祝賀会の手話コーラス

筆者は 10 月の第 1 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムに参加し，学生支援制度や支援窓口について情報を収集した．これらも参考にしながら，本学で課題になっている，大学における身体等に障がいがある学生の受入，バリアフリー委員会の位置付けや入学前から就学（授業）・卒業までの支援体制，支援窓口，支援学生（テイカー含む）の育成，障がいの理解･啓発に関する取り組み，教授法等に関する研修・FD 等について学長に意見を仰ぎ，教務部長，学生部長と検討の上，要請事項をあげることにした．しかしながら，諸々の課題に時間が取られ実現しなかった．

設備の面では，電子計算機センターに車椅子学生用の実習室のプリンタ台の改善と情報ポータル端末・パソコン設置を要望し，大学側の迅速な対応で実現した．また，火災発生など緊急の際に聴覚障がい学生の携帯に自動で緊急メールを送る緊急通報装置が 1 月 20 日から運用開始された．

2.7　2006 年度：テイクの増大と養成講座の充実，学外との連携

聴覚障がい学生が 9 名，その内テイクを要望する学生は 8 名となり前年度より 3 名も増えた．これに備えて次々と新たな取り組みを

行った．４月前にテイカー募集のための準備（ポスターやチラシの作成，入学式の配布資料の作成）を開始し，支援を必要とする学生の事前面談を行った．４月には情報ポータルでテイカー募集の連絡を全学生に向けて行い，全学科のガイダンスでは，２～３分の時間をもらいバリアフリー委員会のPR（図８）とチラシの配布を行った．また，バリアフリー委員会の入会届けのボックスを教務課に設置した．入学式ではバリアフリー委員会の学生がPCテイクを行い，入学生全員に紹介された．これを見て，「格好いい！」とバリアフリー委員会に入った学生も多い．

学期始めに教務部長名で，「身体に障がいを有する学生の障がいの説明と生活面や学習面に関わるケアおよび介助に関するお願い」の文書を全教職員に配布した．さらに，聴覚障がい学生の情報保障にノートテイカーやPCテイカーが付くことについて講義担当者に周知した．

４月上旬に学生が主催したバリアフリー委員会の説明会には約60名の学生が集まり，バリアフリー委員会の学生は119名となった（資料１）．教職員を入れると132名になる．テイカーを配置した講義のコマ数は，前期が76科目1,456コマ（被テイカー８名，テイカー実数70名），後期が82科目1,268コマ（被テイカー８名，テイカー実数65名），合計158科目，2,724コマと大幅に増えた（資料２）．

この年のリーダーは三好正孝（社情３年），副リーダーは白江香澄（人文人間３年），水田奈津美（人文人間２年），テイク統括部部長は青木雄大（社情２年），夕向智博（人文人間３年）で，テイカーの養成と配置を行う部を一つにし，部長を２名にした．学習部部長は平留美（人文人間２年），広報部部長は本間広大（法２年），交流部部長は敦賀佑樹（法２年），CAR部部長：池田大樹（経済２年）である．そして，新たに設置した車椅子代表を島田祐亮（社情３年）が務めた．

この年は，テイクを希望する聴覚障がい学生が増えたため，テイカーは何人いても十分とは言えない状況であった．特に，４年生が３月に卒業して経験豊富で熟練したテイカーがいなくなる新学期の数ヶ月はテイカー不足にいつも悩まされる．新人の研修も始まったばかりで上達するまでに時間を要するため，前年度の後半から次年度のテイカーの確保に向けた取り組みが必要になるが，なかなか思うようにいかない．そのため，この年バリアフリー委員会のメンバ全員がテイク活動に参加するという方針を打ち出す．テイク講習会（図９）の回数も大幅に増やし，学期始めの１～２ヶ月は週２回開催した．講習会で経験を積んだ先輩学生や聴覚障がい学生が新人生のスキルアップの個別指導にあたる形が定着し，教員も模擬講義の講師として協力した．

図８　ガイダンスでのPR活動

図９　学生主催のテイク講習会

テイクの配置については，欠席や補充の連絡などが増え，通信量も膨大になったため，テイク統括部を担当するメンバを増やした．また，特定の人に依存するとその人の都合で迅速な対応ができないことがあることから新たにテイカーの配置と補充のルールを作った．

この年，被テイカーの経験をもつ副リーダーが年度末の文集の中で次のような意見を述べている．

〝副リーダーとして運営することの難しさを感じる一方，同じ被テイカーとして不満を共感するという板ばさみとなり，苦しいと思うことがよくありました．たまたまテイクがきっかけで人間関係の問題が生じたとき，テイクとしての問題なのか個人としての問題なのか，またそこにバリアフリー委員会の責任として入り込んで良いのか，曖昧で悩むことが多かったからです．必ずといっていい程，毎年同じようなテイクに関する不満が出てきます．私は去年まで被テイカーはテイクをしてもらっているのだから…とテイカーに不満が言えませんでした．しかし，テイカーはテイク活動をするのは当たり前のことだと言います．そして被テイカーが感謝の気持ちを忘れずにいれば，テイクという環境が当たり前であることが理想的だと考えていました．実際には，テイカーも被テイカーへの不満や自分のテイクへの不安がたくさんあり，お互いに本音が言い合えていないということが分かりました．何が一番大事でどれを優先したら良いのか判断する力がなく，またテイク統括部との連携がうまくとれなく，たくさんの仲間に迷惑をかけたと思います．〞

リーダーや副リーダー，テイク統括部の学生達が背負ってきた精神的負担は想像以上に大きい．学生と教職員の間に立って気軽に相談できるようなスタッフを置くことができれば，精神的負担は減ったであろうが，私の力量不足もあり実現しなかった．

身体障がい学生に対する新たな取り組みとしては車椅子学生の登下校時の通学介助（雪道介助）がこの年から始まる．車椅子学生の代表から，１年前に車椅子トイレに設置した棚の高さを低くして欲しいという要望があげられたが，これは即刻改善された．高さは確認していたのだが，車椅子学生個々の使い易い高さが異なることや実際に使ってみると勝手が違うというのが原因である．車椅子を利用している学生にも様々な人がいることを思い知らされ，いい勉強になった．

新たな取り組みとして特筆すべきことは，福祉分野を専門とする教員の協力の下，介護体験を積んだ学生達により車椅子学生のトイレ介助が組織的に行われたことである．福祉系のゼミ生の協力を得てバリアフリー委員会のメンバ以外の学生達が多く参加した．これは当事者自らが周りの学生や教職員に自分が必要としている支援について説明をするという地道な努力の中で実現したことで，卒業迄の２年間続いた．当事者である車椅子学生は年度末の文集に下記のような感動的な手記を寄せている．

〝今年の大学生活は，大学１，２年目と比べ，「生きている」心地を実感するものでした．…(略：以下同様)私は，毎日の大学生活を送るために，通学やトイレに介助が必要です．しかし，そのことを，大学の職員の方々や友人など周囲に伝えることを避けていました．それは，周囲に伝えるには，時間やエネルギーが必要だったこともあり，専門の介助者を頼んでいたからです，…しかし，「生きている」心地はしませんでした．通学やトイレに介助が必要であることを，大学内の人々が知らないため専門の介助者なしでは安心できない状態でした．その状態では，大学内の人間関係を広げられず，大学での活動を制限せざるを得ませんでした．

そこで，大学内の様々な人に，「私は何に困っていて，どんな手助けが必要なのか」を伝えようと決心しました．バリアフリー委員

会や人間科学科の先生方，臨床心理学科や人間科学科の学生などに，私の大学生活の土台となる介助の必要性を話していきました．…7名の同学年の方々がトイレ介助を引き受けてくださいました．…さらに4名加わりました．…雪道の通学介助に…学生が13名加わりました．…そのおかげで，私の大学生活で様々な人と接する機会を得られ，障害者としての私を周囲の人に表現できるようになりました．

そうして，「大学生として生きる」と同時に，「障害者として生きる」ことができたように思います．それは，私にとって，本当に「生きている」心地がする環境でした．″（臨床心理学科3年Nさん（「2006年度札幌学院大学バリアフリー委員会文集」より）

様々な体験を経て自立に向かい成長していく学生像が表出している．支援に関わる学生が成長したという話しはよく聞くが，支援を利用する学生達も着実に成長していることがわかる．

運営面では，部長会議の回数を増やし，昼休みにバリアフリー委員会のメンバを集めて全体会議を開いた（8回）．現状の説明とリーダーからの連絡や各部の取り組み，連絡等を行い，話し合う時間ももった．広報部では，車椅子介助者募集のポスターを作成し学内に掲示したり，バリアフリー通信を4回発行するなど広報活動を活発におこなった．学習部は新しい取り組みとして，夏休みの「手話合宿」，「みんなでしゃべり場」（図10）の企画と運営，ボランティア情報収集とボランティア希望者の閲覧用ファイル作成を行う．「みんなでしゃべり場」はこの年からスタートした意見交換の場で，「バリアフリーって何」，「困った時どうするか？」などテーマを設定して，バリアフリー委員会のメンバ同士が率直に意見を交換し理解を深め合う場となった．参加した学生達は様々な意見を聞くことができ大変刺激を受けたという．以後，「札幌学院大学にある／あったらよいバリアフリー」，「情報保障について」，「ろう者とのコミュニケーション方法」，「コミュニケーションの配慮」，「手話を使ってみて思ったこと」，「聴覚障がいを抱える学生と出会って思ったこと」，「補聴器体験をしてどう思ったか」，「肢体不自由児・者について」，「車椅子体験」，「大学に入って得たもの」等々学生達が持ち寄ったテーマについて語り合う場となった．進行の仕方も，「テーマの設定→意見発表→グループ毎の討論→全体発表→まとめ」のようなグループディスカッション形式に発展していく．勿論，PCテイクで情報保障を行っている．バリアフリー委員会の松川教員（人文学部）は「みんなでしゃべり場」に参加して，次のように述べている．

″障がい学生支援でも，支援する側とされる側という非対称の関係は当然のことながら存在します．そのような関係では，支援を受ける学生は常に弱者の側に立たされがちで，障がい学生である前に「ふつうの学生なんだ」ということが双方にとっても周囲にとっても気づかれないまま，アンバランスな力関係の中で支援が行われることがあります．しばしば問題を生じさせることもある，このような事実を乗り越えるのは簡単ではありません．しかし，学生達のこの取り組みをみていると「不可能なことではないな」と感じさせられます．素朴かもしれないけれど，いったんはそ

図10　みんなでしゃべり場

のことを双方が自覚し，とりあえずはそれぞれの思いをぶつけ合ってみる，そして，いっぺんには解決できないけど，できそうなことを実践してみる，その積み重ねが大事なのだろうと思います．このような場を自らで生み出した学生たちの力は本当にすごいなと思います．″

この年は，新しい動きがいくつかあった．5月12日（金）に，バリアフリー委員会の7名の学生が，名寄市立大学の学生と教職員からなる「バリアをなくそう会」が主催する『ノートテイク体験講座』の講師として招かれ，本学のバリアフリー委員会の紹介と本学で行っているノートテイク講習会を名寄市立大学で行った(14)（図11）．PCも持参し，PCテイクの表示画面をプロジェクターで拡大して見せ，学生や教職員，一般市民約60名の聴衆を前に堂々と講師役を務めた．4月からテイカー養成講座を10数回以上開催していたので，自信を持って臨むことができたのであろう．参加者から，「私と一つ上か，同じ学年の方の立派な姿に感激しました」（学生），「良い体験ができた．学生にアドバイスしてもらって，少しずつコツをつかむことができた．「見やすく書けているよ」と言われたときは，本当に嬉しかった」（学生），「大変有意義な，そして感動的な会でした」（教員），という感想が寄せられた．また，PCテイクを初めて見た教職員は「これはすごい」と大変感心されていた．企画された名寄市立大学の先生から，「あらためて学生自身が持っている可能性，学生同士が影響し合うことがもたらす大きな力を感じた．この取り組みは，大学づくりのあり方や，道内の難聴学生の進路の問題，学習権保障の問題にもつながる内容を持っています．」というメールをいただいた．学生達は「初心に返ってバリアフリー委員会を考えることができた」と興奮気味に語っていた．この経験で学生達はさらに大きく成長した．本学の学生達にとっても大変貴重な体験であった．

図11　名寄市立大学でのノートテイク講習会

5月26日には札幌聴力障害者協会の山本浩之さんと渋谷悌子さんをお招きし，「聴覚障がいについて ── 聞こえないという視点」，「聴覚障がいと手話」という講演会を開催した．また，近隣の大学からテイカーの派遣を要請され，9名の学生が空き時間を使って6コマの講義のテイクに入った．学内だけではなく他大学へと活動を広げた．

新國，松川，井上は，日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）が主催した「ノートテイカー指導者養成講座」に参加した．また，教職員で「バリアフリー支援室と現バリアフリー委員会の位置付け」について検討案を学長にあげたが，公式の委員会を作ることで，学生や教職員が自主的に取り組みを発展させてきた良さを阻害するかもしれないという慎重意見があり，大学における支援体制のあり方を検討するまでには至らなかった．

2.8　2007年度：マスコミ取材相次ぐ，ネットワークの拡大，教養ゼミナールの試み

バリアフリー委員会の学生は122名になる（資料1）．リーダーは，敦賀佑樹（法3年），副リーダーは布田美穂子（法3年），テイク統括部部長は吉田恵美（社情2年），学習部部長は森下南（人文こ発2年），広報部部長は山田洸平（人文英語英米2年）でHP担当は池田大樹（経済3年），交流部部長は斉藤友通（人文こ発2年），CAR部部長は増谷梓（人文こ発2年），車椅子代表は島田祐亮（社情4年）

である．学生達が掲げたこの年の目標は「心のバリアをなくそう！」であった．

テイクを希望する学生は前年度と同様8名と多く，昨年に引き続きテイカー不足が予想されたため，筆者は新入生歓迎会の場で，「一人で数名増やすのは大変だが，一人が一人の友人に協力を求め，一人が一人のテイカーを育てることで倍々に増えていく．」という話をした．実際，友人に誘われてテイカーになった学生は多かった．テイカーを配置した講義のコマ数は，前期が71科目約994コマ(被テイカー8名，テイカー実数69名)，後期が55科目(被テイカー8名，テイカー実数50名)，約770コマ，合計126科目約1,764コマと前年に続き多い(資料2)．年間126科目に配置されたテイカーの延べ学生数は約350名になる．配置に関わって様々な課題と向き合うことになり，後期にノートテイクとPCテイクのルールを再検討することになる．また，学習部主催のテイク養成講座，手話勉強会（22回)，手話合宿，みんなでしゃべり場，交流部主催の学内外の企画も活発に行われた．

この年，バリアフリー委員会の教員メンバ(新國，松川，新田)で，全学共通科目の教養ゼミナール「聴覚障がいの理解と支援方法」(前期)を開講した．バリアフリー委員会の活動の紹介や障がい者疑似体験をすることを通して，障がい学生の支援について学び，「協働して問題を解決する」ことの意義を考えることを目的にした．空き時間の関係で木曜日5講時に設定したため，受講生は少なかった．ゼミナールの内容は次の通りである．

(1) 障がいのある学生とともに学ぶ　本学の取り組みと全国の動向（新國）
(2) 本学における障がい学生支援の活動
報告者：バリアフリー委員会の敦賀リーダー，布田副リーダー
(3) 支援すること／されることのすばらしさ――学生の体験から――(コーディネート教員)
(4) 肢体不自由の理解と支援方法（佐藤正尋氏講演）
(5) 支援する／されることを体験する
(6) 障がい者支援の倫理とルール――困難の共有と理解，解決に向けて――(新田雅子，登り口倫子)
(7) 聴覚障がいの理解と支援方法（講演会として企画）
日時：6月9日（土）13時10分～14時40分（3講時）
場所：札幌学院大学　D館2階　D 201
演題「聴覚障がい学生への理解と情報保障」
吉川あゆみ氏（関東聴覚障害学生サポートセンター）
演題「聴覚障がい学生に対する情報保障の支援方法」
中島亜紀子氏（筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター）
PCテイク：バリアフリー委員会学生
(8)～(13) 演習：ノートテイク・PC要約筆記・手話（SAの支援による講習会）
(14) 成果発表会

6月9日（土）の講演会には45名の学生が参加した．聴覚障がいを抱える吉川あゆみ氏の説得力のある講演や情報保障に関わってこられた中島亜紀子氏の支援方法についての講演は，多くの学生の感動と共感を呼び大変好評であった．

この年，電子計算機センターのサポートデスクに映像教材への字幕入れの検討を依頼した．授業では様々な映像教材が使われるが，字幕が入ったものは少ない．映像中の音声を文字にして伝えることはできるが，映像と別の画面や紙面を同時に見ることは不可能なため聴覚障がい学生は不便を強いられてきた．また，ナレーターの言葉には無駄がなく，遊びが少ないためテイカーの負担も大きい．筆者は電子計算機センター長を務めていた関係

から，サポートデスクの学生に映像教材の字幕入れの検討をお願いした．当時のサポートデスクの学生は試行錯誤を重ね，聴覚障がい学生の意見も取り入れながら比較的簡易な字幕入れの方法（映像の下方に字幕領域を追加する形）を考案した．

10 月に筆者と松川敏道（人文学部），井上寿枝（教務課職員）で聴覚障がい学生が履修する科目担当教員に対する調査「聴覚障がい学生に対する講義保障に関するアンケート」を実施した．調査結果については，次稿で詳しく紹介するが，聴覚障がい学生に対する理解やテイカーの評価は大変高いものがあった．

新しい動きとしては，11 月 26 日（月）に四国学院大学の CHC（The Committee for Human Rights Cultural Diversity）センターの活動に参加する学生（17 名）と教職員（5 名）の 22 名が来校され，本学のバリアフリー委員会と交流を深めた．バリアフリー委員会の年度末に発行される文集を読んで感銘を受けたという四国学院大学の学生が立案した研修だという．本学と合わせ 60 名の学生が参加した．午後 4 時から学内施設のバリアフリー化の現状視察，講義のノートテイクと PC テイクの現場見学などを行い，午後 6 時 30 分からD 201 で報告会を行った．布施学長からの挨拶に続き，CHC センターの紹介と活動報告があり，夕食交流会（G館 6 階）をはさんで本学バリアフリー委員会の紹介と，夜 10 時まで密なスケジュールが続いた．「CHC センターの学生達や教職員とこのような機会を持てたことは大変良い経験であった」，「今後も他大学と交流を深め，情報や意見を交換し合いながら，より良い支援が行っていけるよう努力していきたい」と学生達は興奮気味に語っていた．CHC センターの学生達や教職員との交流は大変有意義なものであった．

この年は，マスコミからの取材が相次いだ．UHB「石井ちゃんとゆく！」（山田もと子ディレクター）でバリアフリー委員会の紹介番組が企画され，7 月 9 日に録画撮りがあった．7 月 26 日（木）21 時 54 分～22 時「テイクに挑戦！」，8 月 2 日（木）21 時 54 分～22 時「札幌学院大学バリアフリー委員会」というタイトルで 2 回にわたって UHB で放映された．放映後，http://uhb.jp/program/official/ishiichan/ishiichan_top.html から動画配信されている（閲覧時は，日付で検索要）[15]．

7 月 11 日（水）にリクルート発行の雑誌『カレッジマネジメント』の「当代学生リーダー」の編集者が取材に来校し，敦賀リーダーにインタビューした記事が掲載された[16]．また，江別市広報課からも取材を受け．『広報江別』10 月号にバリアフリー委員会の紹介記事が掲載された[17]．さらに，12 月に朝日新聞の「大学　極める」（全国版）を担当する記者の取材を受けた．これは 2008 年 1 月 28 日の朝日新聞の教育面に掲載された[18]．

この年，バリアフリー委員会の OB 会（後に OB・OG 会）が発足し，10 月 13 日（土）に本学において第 1 回会合があった．35 名が参加し在学生と交流を深めた．

学外とのネットワークも拡大した．9 月に「日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）」の連携大学へのお誘いを受け，本学が北海道で初めて連携大学として名を連ねた．さらに，8 月には筑波技術大学の石田久之氏の支援で，道内の 16 大学・短大・高専の教職員有志が集まり，北海道障害学生修学支援懇話会を設立した．これは，障がい学生の修学支援に携わる大学等教職員の情報交換，学習の場として設けたもので，2007 年度は懇話会を 4 回開催した．毎回，石田久之氏が連続講座を担当してくださり，「支援体制とその構築」，「学内啓発」，「学びと成長」，「自立支援としての修学支援」について学び合いながら，情報交換を行うことができた．

また，10 月 20 日の第 3 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムの分科会 3「利用学生，情報保障者，教員の三者による情報

保障の質的充実」において，新國は「教員からの要望，そこから一歩踏み出すには…」と題し，講義担当者に対するアンケート調査なども紹介して話題提供を行った．

11 月 17 日（土）に日本学生支援機構北海道支部主催（札幌学院大学バリアフリー委員会共催）で「障がい学生支援セミナー・ノートテイカー養成講座」を小樽商科大学札幌サテライトで開催した[19]．「第一部：障がい学生支援セミナーについて」では，石田久之氏による「障害学生支援の現状と課題」と白澤麻弓氏による「聴覚障がい学生への学習支援」という講演が行われた．続いて，要約筆記通訳者サークル「ふきのとう」による「第二部：ノートテイカー養成講座」が行われた．本学バリアフリー委員会からは 25 名の学生が参加し，ここで学んだ成果をバリアフリー委員会に持ちかえり，取り組みに反映させた．

2.9 2008 年度：学内外における新たな連携

バリアフリー委員会の学生は 123 名になる（資料１）．リーダーは江崎拓郎（人文こ発３年），副リーダーは小山倫枝（人文人間３年）・森下南（人文こ発３年）・山田洸平（人文英語英米３年）の３名である．テイク統括部部長は大原麻美（人文こ発３年），学習部部長は下舘祐希（法２年），広報部部長は澤田晴恵（人文こ発２年），HP 担当は山田洸平（人文英語英米３年），交流部部長は今田拓実（人文こ発２年），CAR 部部長は福士友佳子（人文こ発２年），介助部部長は青木貴大（人文人間３年）である．この年のスローガンは，〝みんなで作る，みんなのための，バリアフリー委員会〟である．「バリアフリー委員会は会員のみんなが必要で，みんなで足りないものを補い，協力し合うみんなのための団体」，「一人が欠けても周りで支え補い合う」，「一人だけで頑張るのではなく，会員同士がつながりを大切にして助け合う」という思いを込めているという．

テイクを希望する学生は前年度と同様 8 名で，テイカーを配置した講義のコマ数は，前期が 65 科目約 910 コマ（被テイカー 8 名，テイカー実数 50 名），後期が 55 科目（被テイカー 8 名，テイカー実数 46 名），約 770 コマ，合計 120 科目約 1,680 コマになる（資料１）．テイク講習会ではチェックリストを作成して指導時に活用することも行われた．

学生からの要望で，学期始めに教務部長名で出している聴覚障がい学生に対する情報保障についてのお願い文書に「テイカーの役割と仕事」についての説明を付記することにした．また，英語版も作成して外国人の教員にも周知した．この年，身体障がい学生の登下校時や学内移動時の介助そして筆記代行や実習等の準備・後始末の補助などを担当する介助部が新たにできた．通学および学内移動介助（無償ボランティア）を利用した学生は 4 名で，支援学生実数は 25 名であった．

建物改善では，10 月に 3 号館入口ドアが自動ドアに改修され，車椅子用のスロープも近くに増設され大変便利になった．

この年，サポートデスクが映像教材への字幕入れを本格的に開始し，60 本の映像教材に字幕を入れた．質の高いサービスを行うために「字幕入れルール」も作成した．中心になったサポートデスクの学生は後輩のために「字幕入れの手引き書」を作成して卒業していった．字幕入れにより，映像教材に対する情報保障の確保と共にテイカーの負担も大幅に軽減化された．2009 年 2 月 15 日にサポートデスクの学生スタッフと聴覚障がい学生そしてテイカーが参加する「字幕入れに関する意見交換会」が開催され，これを元に「字幕入れルール」が作成された．障がい学生支援においては，様々な困難な課題に直面するが，専門的な知識や経験を有する教職員と学生が連携することで解決することができることを実感した．サポートデスクの映像教材の字幕入れの取り組みは，2009 年 2 月 20 日の朝日新

聞朝刊（北海道総合欄）「聴覚障害の学生支援映像資料に字幕」[20] や同日の北海道新聞朝刊（江別版）「聴覚障害者向け映像教材」）[21] で紹介された．

PEPNet-Japan の第 4 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムで企画されたポスターコンテストに本学のバリアフリー委員会の取り組みを紹介するポスター 6 枚を出品した．広報部の学生や 4 年生が中心となり 10 人ほどで 8 枚のポスターを制作したが，展示の関係で 6 枚に絞らざるを得なかった．このとき制作されたポスターは支援組織と年間スケジュール，テイク講習会，テイクテキスト，広報活動，手話勉強会，みんなでしゃべり場，交流会，障がい学生も参加する支援など，バリアフリー委員会の取り組みの内容と成果が一目でわかるものであった．その後，多少手を加えて，バリアフリー委員会の紹介ポスターとして活用している．

聴覚障害教育を考える北海道連絡協議会から依頼があり，11 月 9 日（日）の『第 10 回ろう教育フォーラム in 北海道』の分科会 II「大学における情報保障の取り組み」において，新國と江崎学生リーダーが「大学における情報保障」，「札幌学院大学のバリアフリー委員会」と題して講演した[22]．本学以外の 2 大学の学生の発表もあったが，その他の大学生の参加もあり，有意義な意見交換ができた．本学 OB の工藤努さんも参加していたが，教員採用試験（特別支援学校小学部）に合格し A 登録されたという嬉しいニュースを聞いた．卒業してから通信教育で小学校一種免許状を取得し，採用試験に向けて一生懸命努力されたという[23]．2009 年 4 月から札幌の聾学校小学部で教壇に立っている．

昨年に引き続き，11 月 15 日（土）に『障がい学生支援セミナー』（於：北海商科大学）を日本学生支援機構北海道支部と共催した[24]．プログラムは，基調講演「障害学生に対する授業保障支援の取組み」（関西学院大学キャンパス自立支援課コーディネーター大椿裕子氏）と「パソコンテイカー養成実践講座 ── パソコンテイクの方法を実践を通して学ぶ」（要約筆記通訳サークル〝ふきのとう〟）である．本学からは 15 名の学生がセミナーに参加し，この内 5 名の学生が「基調講演」のパソコンテイカーや「パソコンテイカー養成実践講座」のサポーター（ボランティア）として活躍した．

『福祉のひろば』11 月号に山田洸平さん（人文英語英米 3 年）の「バリアフリーな社会をめざして ── ともに学び合うための支援活動」が掲載された[25]．

昨年度発足した OB･OG 会は，卒業生の会『BestFriend の会』を設立し，10 月 12 日に第 2 回総会を開いた．卒業生とバリアフリー委員会の在学生が一同に会し交流を深めた．通信も 2 号発行した（バリアフリー委員会の HP に掲載）．

OB である人文学部科目等履修生の島田祐亮さん（2008 年 3 月札幌学院大学社会情報学部卒業）が，2009 年 2 月 6 日千歳科学技術大学で開催された教育システム情報学会「JSiSE 学生研究発表会」において，「障がいを持つ学生の支援・学習ツールとしてのノート PC ── 利活用方法に関する一考察 ──」[26] を発表し，「特別優秀賞」を受賞した．島田さんは，上下肢が不自由で，ノートテイクの支援を受ける傍ら，自らもパソコンを活用してノートを取りながら授業を受けていたが，バリアフリー委員会の講義保障のパソコンテイクおよびパソコンでノートを取った自らの経験に基づき PC の支援・学習ツールとしての活用方法をまとめた．発表原稿とプレゼンテーションの作成では，社会情報学部の皆川雅章先生の指導を受けたが，大学 4 年間のバリアフリー委員会の支援活動に障がい学生として主体的に関わってきた経験が本成果をもたらしたと喜んでいる．

2009 年 3 月に定年退職された元人文学部

図 12　お礼訪問（中央が酒井先生）

教授の酒井恵真先生（図 12）から，「バリアフリー委員会の活動に役立てて欲しい」と大学に 50 万円の寄附があり，次の言葉が寄せられた．

「私は，バリアフリー委員会の活動開始に際していささか関わりがあったものとして，その活動に強い関心を持ってきました．その後の目覚ましい活動は，札幌学院大学において出色のものであり，私にとっては感動的なものです．単に学生のボランティア活動に止まらず，教職員を含む教育実践活動の独自モデルとして，札幌学院大学の教育方法の革新を図る上で大きな示唆と可能性を与えてくれます．そうした目覚ましく価値のある実践団体の活動を直接応援したいというのが私の主旨です．」

さらに，活動資金にとダンボール 7 箱分の本も譲り受けた．今までバリアフリー委員会を育ててくださった先輩たちや教職員そして現メンバと共に酒井先生のご厚意に感謝した．酒井先生のお気持ちを十分くみ取り，期待に応えられるよう，〝誰にとっても学びやすいバリア無き大学〟をめざし，学生と教職員が力を合わせて地道に取り組みを行っていこうと誓った．

2.10　2009 年度：学内体制と学外ネットワークの新たな展開

バリアフリー委員会の学生は 120 名（資料 1），サポートデスクの協力会員 10 名を含めると 130 名になる．リーダーは小林舞子（人文こ発 3 年），副リーダーは齋藤輔（人文こ発 3 年）・笹綾花（社情 3 年）・鶴田躍（人文こ発 3 年），テイク統括部部長は大森友佳・坂本亜由美（人文臨床心理 2 年），学習部部長は高橋早希・西尾舞（人文人間科学 2 年），広報部部長は渋谷大介（人文こ発 2 年），HP 担当は今田拓実（人文こ発 3 年），交流部部長は小山内翔（人文人間科学 2 年），CAR 部部長は得永宏貴（人文人間科学 2 年），介助部部長は太田康文（人文人間科学 2 年）である．スローガンは，昨年度と同様〝みんなで作る，みんなのための，バリアフリー委員会〟である．新体制の下，初めてバリアフリー委員会の全貌が一目でわかるＡ 4 裏表の 3 つ折りパンフレットが制作され，学内外で活用されている．

テイクを希望する学生は 7 名で，テイカーを配置した講義のコマ数は，前期が 61 科目約 915 コマ（被テイカー 7 名，テイカー実数 45 名），後期が 59 科目約 870 コマ（被テイカー 7 名，テイカー実数 46 名），合計 120 科目約 1,785 コマである（資料 2）．下肢不自由学生の介助については，前期の登下校時の介助の利用学生は 2 名で支援学生実数は 28 名，筆記代行の利用学生は 1 名で支援学生実数は 20 名である．後期の登下校時の介助の利用学生は 2 名で支援学生実数は 26 名，筆記代行の利用学生は 3 名で支援学生実数は 25 名である．

筆者は，12 月 10 日（木）の法学部の公開講座「人権・共生・人間の尊重 ── あらためてその理念と現実を考える」で，「法の下の平等と障がい者～本学のバリアフリー委員会の取り組みから，障がいを抱える学生との共生について考える～」と題して講義を行った．聴覚障がいの疑似体験も取り入れたが，受講生の反響が予想以上のものがあり驚いた．バリアフリー委員会の教職員や学生が連携してこのような話をする機会を設けることは，理解・啓発の推進力になると感じた．

その他にも次の通り本学の取り組みを紹介する機会があった．

・11 月 3 日（火）の第 5 回「日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム」（PEPNet-Japan 主催）の分科会 4「支援学生のスキルアップ ── 聴覚障害学生のニーズに応えるために ──」の事例紹介で，4 年生の山田洸平さんが「先輩・聴覚障がい学生の個別指導によるスキルアップ」について報告した[27]．

・同時開催の「聴覚障害学生支援に関する実践実例コンテスト 2009」の「パネル発表部門」で電子計算機センターのサポートデスクが「字幕入れポスター」を出品した．また，「PR･啓発グッズ部門」に「パソコンテイカー養成テキスト」と「字幕挿入マニュアル」を出品した．

・11 月 7 日の PC カンファレンスで，松本涼子（情報処理課職員，サポートデスク担当）･今井秀美（社情 4 年）他で「映像教材への字幕入れサービス～聴覚障がい学生の情報保障の一環として」を発表した[28]．

・2010 年 1 月 30 日，PEPNet-Japan が主催する「聴覚障害学生支援技術講習会」の【講座 3　ビデオコンテンツへの字幕挿入講座】において，サポートデスク担当職員（松本涼子）の代理で．本学のサポートデスクで行っている字幕入れについて，字幕入れルールの紹介と字幕入れ体験の講習を行った．用意周到に準備してくれたサポートデスクの手引き書やプレゼン映像を使って効果的に進めることができた．当日のテキスト等は全て PEPNet-Japan の HP からダウンロードできるようになっている．

この年は学内外で連携が大きく進展した．学内では，副学長，教務部長，学生部長，入試部長，就職部長などで構成される「障がい学生支援会議」が設置され，当初からの念願であった部署間の連携をとる学部横断的な組織が実現した．今後，本学における障がい学生の受け入れや支援についての方針の作成，現バリアフリー委員会の支援部門としての位置づけなどについて検討されることになっている．

新たな学外との連携は 2 つある．一つは，日本学生支援機構（JASSO）の事業である〝教職員のための「障害学生修学支援ネットワーク」〟[29] の北海道ブロックの拠点校になったことである．拠点校の役割は，1）大学等で障がい学生支援を担当する教職員の相談を受ける「相談事業」，2）支援を必要とする学生に対する「研修事業」，3）各機関において具体的な支援策の研究を促進する「研究促進事業」であるが，障がい学生支援について様々な情報を入手することができることが大きな利点である．新國は日本学生支援機構が発行する『大学と生活』12 月号に「札幌学院大学バリアフリー委員会の取組 ── ボトムアップからの歩み，学生と教職員のコラボレーション ──」というタイトルでバリアフリー委員会のこれまでの取り組みを紹介した[30]．

もう一つは，アクセシビリティリーダー育成協議会に加盟したことである．本協議会では，アクセシビリティリーダーを〝障害の有無や身体特性，年齢や言語・文化の違いに関わらず，情報やサービス，製品や環境の「利便性を誰もが享受できる豊かな社会」を創出する知識・技術・経験とコーディネート能力を持った人材〟，すなわち，多様性をよく理解し，「人に優しい社会」をリードする人材と謳っている．本協議会は，アクセシビリティリーダーの育成の推進と認定，アクセシビリティリーダーの活躍の場の開拓と人材活動の方策を協議することを目的に設置されている．協議会に加盟したことにより，2010 年度から，本学の全学生および教職員はアクセシビリティリーダー育成プログラム STEP1～STEP2 をオンライン講座で学ぶことができる．また，講座修了後に，2 級のアクセシビリティリーダー認定試験の受験資格を得るこ

とができる．さらに，STEP3（１年間の支援経験）と STEP4（2011 年度に開講されるコーディネート技術に関する演習科目（２単位））を履修することで１級のアクセシビリティリーダー認定試験の受験資格を得ることができる．詳細については，2010 年度に詰めることになるが，バリアフリー委員会の学生には受講して資格を取得して欲しいと考えている．１級のアクセシビリティリーダー認定試験合格者は，さらに上のレベルのアクセシビリティリーダーキャンプに参加することが可能になる．

３．バリアフリー委員会の成果と課題

これまでのバリアフリー委員会の成果をまとめると次のようになる．

１）聴覚障がい学生および身体障がい学生に対する学生による組織的な支援

前章および資料２で示す通り，聴覚障がい学生および身体障がい学生に対する支援は充実している．特に，ここ数年はテイカーを必要とする聴覚障がい学生数が７～８名と多く，テイカーを希望する科目が通年で 120 から 160 科目，コマ数にすると 1,600～2,000 コマを超えるが，要望されるほぼ全ての科目にテイカーを配置できた．また，字幕入れについては，こちらも電子計算機センターの学生組織であるサポートデスクの組織的な取り組みにより，聴覚障がい学生の情報保障の進展とテイカーの負担の軽減化が実現した．さらに，地味な取り組みではあるが，身体障がい学生の支援についても個々人のニーズに耳を傾け，必要とされる支援を行ってきた．これらは，すべて学生達の組織的な取り組みの成果であり，これまで学生達が行ってきた様々な工夫や努力の積み重ねによるものである．

２．で詳細に紹介した通り，学生達は必要とされる部を次々と考え出し，紆余曲折を経ながら，現在の組織構成に至っている（図 13）．現在は，代表と副代表の下に６部が置かれ，

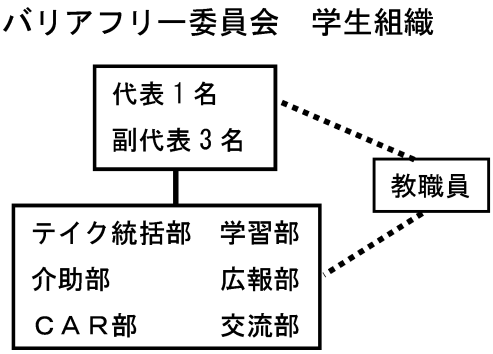

図 13　バリアフリー委員会の学生組織

その企画から実践までを学生達が主体的に担っている．教職員はリーダー，副リーダーそして各部の学生達を横から見守りながら支えている．バリアフリー委員会が自主的な組織であり，ニーズに柔軟に対応できたことが，学生主体の組織づくりを可能にしてきたと考えている．

２）障害を抱える学生，支援学生，教職員が連携した取り組み

発足当時から，バリアフリー委員会に関わった学生や教職員たちは，「障がいを持つ学生とともに諸問題に取り組み，ともに歩む」（2003 年度の宮町リーダーの言葉）という姿勢で様々な問題に取り組んできた．これはバリアフリー委員会のスタンスとして現在まで受け継がれている．特に，障がいを抱える学生自身も主体的に関わってきたことや学部学科や学年をこえた交流ができることがバリアフリー委員会の取り組みを豊かなものにした．また，テイク講習会，手話勉強会，手話合宿，みんなでしゃべり場，スポーツ交流会，手作りの歓送迎会など様々な企画を催すことで，相互に理解を深める場をもってきたことが，連携を強固なものにしてきたと考えている．

３）困難な問題は解決すべき課題

バリアフリー委員会では，現場で困っていることに注目し，それを解決する方法を考えることを優先してきた．そして，さらなる改

善をめざして試行錯誤を重ねてきた．解決が困難な問題については，専門家に相談したり，前述したネットワークを活用して先進的事例に学んだ．学生達は様々な難題を抱えて苦しい思いをしてきたにも関わらず，「バリアフリー委員会の活動は楽しい」と言う．種々の取り組みのなかで学部をこえて先輩や後輩たちと課題を共有し，解決してきたことが楽しい気持ちにつながっているのだろう．一つ乗り越えたその向こうに，また別の課題が横たわっていて，そこからまた新たな試行錯誤が始まる．様々な困難にぶつかり，「やめたくなった」と涙を流す学生も多い．しかし，それを乗り越えて卒業する時は，「バリアフリー委員会がやっていることは素晴らしい．あとをよろしく頼みます．」と後輩や教職員に伝えて出て行く．筆者は発足当初からこの言葉を何度も聞いてきた．障がい学生が困っている問題を自分達の取り組むべき課題と考えてきたことが，このような結果をもたらしたと考えている．

4）〝相互の育ち合い〟

現在の技術では，聴覚障がい学生に対する情報保障には多くの人手を必要とするが，それを担う人はいつでもどこでも簡単に得られるというものではない．本学では学生達がそれを担ってきたが，それを行える学生を養成し，配置し，時には欠員を補充するといったことができなければ継続的な支援は成り立たない．大学の特長は，毎年卒業生を出すと同時に新入生が入学してくることである．その特長を生かした仕組みつくりが必要である．バリアフリー委員会の取り組みではあらゆる場面で〝先輩が後輩を育てる〟ことが定着し，様々な取り組みにおいて後輩が育つとともに先輩も育てられ，障がい学生や支援学生は勿論のこと，関わる教職員も学生達に学びながら育てられてきた．新入生にとっては全てがいつも新しい課題であり，先輩にとっても新たに加わる後輩を育てることは，いつも新しい課題であった．そのなかで，必然的に人間関係も形成されてきた．本学に来るまでは人前で手話を使うことを避け，補聴器を隠すようにしてきた聴覚障がい学生が，堂々と手話を使い補聴器も隠さない先輩に会ってから，「人前で手話が使えるようになり，補聴器も隠さなくなった」と述べている．四年間支援に関わってきた学生は「支援において第三者の視点で見ることの大切さを学んだ」と言う．また，手話の資格をとった学生は「手話を学ぶのではなく，手話で学ぶことが大切．手話をコミュニケーションに使えなければ意味がない．」と言う．いずれも実体験に裏打ちされた含蓄のある言葉である．このような学生達の姿は，〝障がい学生も支援学生もそれぞれ成長していく存在〟であることを教職員に気付かせてくれた．そして，教職員も学生達に学んだ．本学の障がい学生支援は，このような〝相互の育ち合い〟という素晴らしい副産物を生み出しながら現在に至っている．

5）学生と教職員のコラボレーションの主体的な営みの場の創設

バリアフリー委員会はその経緯から委員会と名乗ってきたが，実は，バリア無き大学をめざした，障がい学生と支援学生そして教職員が取り組む〝終わることのない壮大なる学生支援プロジェクト〟と呼んだ方が適当かもしれない．〝学生と教職員のコラボレーションの主体的な営みの場〟の一つの体現ととらえることができる．これまでみてきたように，障がい学生支援は，支援学生，障がいを抱える学生，教職員との連携があって可能になった．学内の支援体制を整備することや，専門的な知識を有する学外者や関係する機関の協力を仰ぐことも必要であった．しかしながら，最も重要なことは，そこで学ぶ学生達の理解と協力を醸成し，障がい学生や支援学生自らが主体的に参画できる〝学生と教職員のコラボレーションの主体的な営みの場〟を創り出すことであったように思う．バリアフリー委

員会はこのような場であった．考えてみると，これは教育機関であれば，障がいの有無に関係なくどこででも必要とされている普通のことであった．

6）障がい学生支援会議の設置

バリアフリー委員会の発足当初からの念願であった，学内の各部署間の連携を図る組織「障がい学生支援会議」が実現した．これまでバリアフリー委員会が向き合ってきたテーマを大学のテーマとして位置付けることができた．大学として，〝障がい〟をどのように考え，どのように向き合っていくのか，どのような支援環境を作っていくのか，議論する場ができたことは大きな前進である．

7）学外との連携による支援の充実

大学独自で解決できない問題について，日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）や教職員のための「障害学生修学支援ネットワーク」（日本学生支援機構），そしてアクセシビリティリーダー育成協議会など全国的に展開されているネットワークに参加することで先進的な実践事例や支援方法についての情報を容易に入手できるようになった．学生達も本学の取り組みを紹介したり，交流する機会が増えたことにより，学びの場が拡がった．ネットワークと繋がることで，個々人そして個々の組織が相互に結びつき，障がい学生支援の取組全体が底上げされることになり，誰にとっても学びやすい〝バリア無き学びの場〟が実現されると考えている．

これまでの取り組みの課題をまとめると次のようになる．

1）学生達の精神的な悩みへの対応

ここ数年は，組織が大きくなり，学生達はこれまで行ってきた活動を継続することに精一杯で，自分自身の取り組みとして考える余裕がなくなっているところが見受けられる．先輩達が築き上げた実績にプレッシャーを感じる学生も多い．それが精神的な負担にもなる．リーダーや副リーダー，部長を経験した学生達が一番辛いと感じることは，いろいろな企画をしても参加者が少ないときであると言う．また，教職員にも言えないような人間関係やちょっとしたことで悩むことも多いと聞く．そんなとき，教職員と学生の間で気軽に相談できるコーディネーターのような人を置いて欲しいという要望が出されている．これは解決しなければならない喫緊の課題の一つである．

2）大学としての支援体制のあり方

バリアフリー委員会に関わった学生や教職員たちがこれまで行ってきた膨大な仕事は，勉強をしながら，教育をしながら，研究をしながら，事務をしながら，片手間でできるようなことではなかった．大学としてこれらの支援を支える体制が必要である．例えば，障がい学生支援部門（室）を設け，これまで学生，教職員が担ってきたコーディネーターとしての仕事（相談にのることも含む）を担当するスタッフを置き，障がい学生，支援学生，教職員と連携をとりながら，大学全体を巻き込んだ形で協力体制を創り出していくといったことである．新学期の数ヶ月はどこの大学でもテイカー不足に悩まされるが，授業で話す内容や連絡事項をできるだけ文章化した資料を作成しておくと，周りの学生がそれを指さしすることでテイクの代わりをすることができる．コーディネーターが担当教員や関連部署にこのような方法を伝えることで新学期のテイカー不足時期を乗り切ることができる．コーディネーターを置くときに最も避けなければならないことは，担当スタッフに障がい学生支援の全てを任せてしまうことである．これはスタッフを自滅させることにつながる．そもそも，教育現場や窓口で学生に関わる教職員が障がいに対する理解を深め，現場で必要な配慮を行わなければ，障がい学生が抱える問題は解決しない．バリアフリー委員会の取り組みを振り返ると，全学的な協力

体制を創り出すヒントを見出すことができる．筆者等は一つの案として，「札幌学院大学における学生支援体制についての要望 ── キャンパス・サポート・センターの設置 ── (案)」を作成して学長に提出した (2008 年 12 月)．

3）身体的障がい以外の障がい支援

発達障がいや精神的障がいを抱える学生に対する支援については，次年度配置される専任の学生相談室カウンセラー（臨床心理士）を中心に検討されることになっている．学生相談室や学習支援室と連携しながら本学全体の学生支援環境を整備していくことは今後の課題である．

4．おわりに

本稿では，本学のバリアフリー委員会のこれまでの経緯と障がい学生支援の取り組みを中心にその成果と課題を概観した．筆者等は，支援を利用する学生や支援に関わる学生，教職員と共に「学び，育ち合う」場を共有するなかで，〝誰にとっても学びやすい環境づくりは，教職員と学生が共に創り出していくものである〟ことを学んだ．

本学が障がいを抱える学生に門戸を開いてきたこと，学びたいと思う誰もが学ぶことができる大学であるということは間違ってはいない．〝障がいを持つ，持たないに関わらず，個々の学生とともに諸問題に取り組み，ともに歩む〟ことが普通のことと感じられるような環境づくりに向けて一歩一歩進んできたことも確かである．障がいの有無に関わらず学びたいという意志を持つ学生に，その能力に応じて等しく教育を受ける機会を保障することは高等教育機関に課せられた責務であるが，全ての学生に対して完全無欠な環境を用意できている大学は少ないであろう．障がいは個別性が高い．障がい学生が入学して初めてその環境が用意されていないことに気づくことが多い．日々進行する教育現場においては緊急性を要する支援が求められるため，学びながら支援を行うこともある．しかしながら，地味ではあっても改善する努力をし続けることが大切である．この営みは完結することはないが，よりよい環境がつくられていくことにつながる．このような構えで「障がい」に対する配慮や対応を行っていくことで，障がい学生も在学する学生の一人になることができる．これまでのバリアフリー委員会の取り組みはそれが実現可能であることを示してきた．つまるところ，本学が「学生一人一人を大切に思い育てる大学」であるのか否かが試されてきたように思う．

6．謝　辞

バリアフリー委員会の取り組みは，バリアフリー委員会の学生，OG／OB，布施晶子学長，山本純先生（以前の教務部長，就職部長），そしてバリアフリー委員会の取り組みに賛同して関わってこられた教職員の皆様のご理解とご努力がなければ実現しませんでした．ここに記して皆様に感謝申し上げます．また，酒井恵真名誉教授から多大なる寄附をいただきましたことをお礼申し上げます．

本研究は 2009 年度の札幌学院大学「研究促進奨励金（共同研究）」の交付を受けています（研究課題番号：SGU-G09-191014-03，研究課題名：「本学バリアフリー委員会の 8 年間の実践にみる障がい学生支援の成果と課題」，研究代表者：新國三千代）．ここに記して感謝の意を表します．

注

（注 1）議論の中で，「障害ではなく，障碍とすべき」，「障碍の碍もさまたげるという意味があり，必ずしもいい表記とは言えない」，「表記よりも，実態としてこの言葉をどのような意識で使っているのかといったことを議論する方が重要である」，「北海道や札幌市では『障がい』を用いている」など様々な意見が出された．建

設的な方向性が見出せない議論は避けようということから，北海道や札幌市が用いている「障がい」を使用することにした．

参考文献・関係資料

⑴ 筑波大学第二学群人間学類編集，『聴覚障害学生のサポートに関するガイドブック』（1998年3月発行）．

⑵ 北海道教育大学函館校バリアフリー委員会編集，「大学とバリアフリー 1999年5月～2002年3月：あるキャンパスの経験」，『北海道教育大学函館校バリアフリー委員会2001年度報告』，2002年3月発行．

⑶ 「特集／分けない社会へのアプローチ ── 巻頭座談会「バリア」なき大学へ ──」，『札幌学院大学評論』第27号 pp.9-23（2003年度発行）．

⑷ IPtalkのURL：http://iptalk.hp.infoseek.co.jp/

⑸ 新國三千代，「リアルな講義を伝えたい！難聴学生へのパソコンによる講義支援」，『札幌学院大学評論』第25号（2001年度発行）．

⑹ 山口渉，「難聴学生に対する講義保障ボランティア活動 ── ノートテイクとパソコン通訳 ──」，『札幌学院大学学園広報』（2003年2月21日発行）．

⑺ バリアフリー委員会ホームページのURL http://www.sgu.ac.jp/bfc/

⑻ 工藤努，「特集／分けない社会へのアプローチ ──「障害に負けるな」──」，『札幌学院大学評論』第27号 pp.24-25（2003年度発行）．

⑼ バリアフリー委員会の年度末報告書

「2004年度札幌学院大学バリアフリー委員会論文集」（2005年2月発行）

「2005年度札幌学院大学バリアフリー委員会文集」（2006年2月発行）

「2006年度札幌学院大学バリアフリー委員会文集」（2007年2月発行）

「2007年度札幌学院大学バリアフリー委員会文集」（2008年2月発行）

「2008年度札幌学院大学バリアフリー委員会文集」（2009年2月発行）

「2009年度札幌学院大学バリアフリー委員会文集」（2010年2月発行）

⑽ 「授業の工夫・改善に関するシンポジウム ── 身体障がいを有する学生として本学で学ぶ」（2004年12月21日），全学教務委員会・人文学会幹事・バリアフリー委員会共催．

⑾ 新國三千代，「山崎栄子さん（長崎県ろうあ原爆被爆者）を迎えてバリアフリー委員会5周年記念講演会開催」，SGU学長室ニューズレター『コラボレーション』No.7（2005年11月21日発行）．

（補足：5周年記念講演会タイトル「障がいと世界平和について考える」）

⑿ 長谷川祐也（法4年），「学生リポーター走るキャンパス最前線」，2005年7月27日北海道新聞朝刊．

⒀ 沖野友輔（社情2年），「聴覚障がいを乗り越え東國大學校留学中」，『札幌学院大学学園広報』第92号（2005年11月4日発行）．

⒁ 新國三千代，「バリアフリー委員会の学生7名名寄市立大学の「ノートテイク体験講座」講師として招聘される！」，SGU学長室ニューズレター『コラボレーション』No.9（2006年7月発行）．

⒂ UHB「石井ちゃんとゆく！」（山田もと子ディレクター）

2007年7月26日（木） 21時54分「テイクに挑戦！」，

2007年8月2日（木） 21時54分「札幌学院大学バリアフリー委員会」

HPから閲覧可（http://uhb.jp/program/official/ishiichan/ishiichan_top.html）

⒃ 「当代学生リーダー」（学生リーダー敦賀さんのインタビュー記事），『カレッジマネジメント』（2007年10月リクルート発行）．

⒄ バリアフリー委員会の紹介記事，『広報江別』2007年10月号．

⒅ 「大学 極める」（バリアフリー委員会の紹介

記事)，(朝日新聞全国版)，2008 年 1 月 28 日.

⑲ 「障がい学生支援セミナー」(講演とノートテイカー養成講座)，日本学生支援機構北海道支部主催，札幌学院大学バリアフリー委員会共催，於：小樽商科大学札幌サテライト，2007 年 11 月 17 日.

⑳ 「聴覚障害の学生支援　映像資料に字幕」，2009 年 2 月 20 日朝日新聞朝刊（北海道総合欄).

㉑ 「聴覚障害者向け映像教材」，2009 年 2 月 20 日北海道新聞朝刊（江別版).

㉒ 新國三千代：「大学における情報保障」，江崎拓郎：「札幌学院大学のバリアフリー委員会」，『第 10 回ろう教育フォーラム in 北海道』分科会 II，聴覚障害教育を考える北海道連絡協議会主催，2008 年 11 月 9 日，札幌.

㉓ 工藤努，「教職採用試験に合格するまで」，「SGU 教師教育研究第 23 号」pp.44～47，2009 年 3 月.

㉔ 「障がい学生支援セミナー」(講演とパソコンテイカー養成実践講座)，日本学生支援機構北海道支部主催，札幌学院大学バリアフリー委員会共催，於：北海商科大学，2008 年 11 月 15 日.

㉕ 山田洸平（人文英語英米 3 年)，「バリアフリーな社会をめざして ── ともに学び合うための支援活動」，『福祉のひろば』11 月号 (2008 年)

㉖ 島田祐亮，皆川雅章，新國三千代，「障がいを持つ学生の支援・学習ツールとしてのノート PC ── 利活用方法に関する一考察 ──」，教育システム情報学会「JSiSE 学生研究発表会」(於：千歳科学技術大学)，2009 年 2 月 6 日.

㉗ 山田洸平（人文 4 年)，「先輩・聴覚障がい学生の個別指導によるスキルアップ」，第 5 回「日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム」分科会 4「支援学生のスキルアップ ── 聴覚障害学生のニーズに応えるために ──」，PEPNet-Japan 主催，2009 年 11 月 3 日.

㉘ 松本涼子・今井秀美（社情 4 年)，「映像教材への字幕入れサービス～聴覚障がい学生の情報保障の一環として」，『PC カンファレンス』，2009 年 11 月 7 日.

㉙ 〝教職員のための「障害学生修学支援ネットワーク」″ JASSO ネットワーク（日本学生支援機構(JASSO)事業)，http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/shien_network/nw.html

㉚ 新國三千代，「札幌学院大学バリアフリー委員会の取組 ── ボトムアップからの歩み，学生と教職員のコラボレーション ──」，『大学と生活』12 月号 11～15 頁，日本学生支援機構 2009 年 12 月発行.

資料１　2002 年度～2009 年度の年度別バリアフリー委員会の学生組織構成

１）2002 年度バリアフリー委員会学生組織構成（支援利用学生含む）

〔学部別集計〕

学　部	学　科	登録数	%
商学部第一部	商学科	1	1.9
商学部第二部	商学科	1	1.9
経済学部	経済学科	2	3.7
法学部	法律学科	18	33.3
社会情報学部	社会情報学科	16	29.6
人文学部	人間科学科	8	14.8
	英語英米文学科	4	7.4
	臨床心理学科	4	7.4
合　計		54	100

〔学年別集計〕

学　年	登録数	%
1	14	26
2	12	22
3	13	24
4	15	28
科目等履修生	0	0
合　計	54	100

２）2003 年度バリアフリー委員会学生組織構成（支援利用学生含む）

〔学部別集計〕

学　部	学　科	登録数	%
商学部第一部	商学科	3	4.3
経済学部	経済学科	1	1.4
法学部	法律学科	13	18.8
社会情報学部	社会情報学科	19	27.5
社会情報学部	社会情報学科	16	29.6
人文学部	人間科学科	10	14.5
	英語英米文学科	8	11.6
	臨床心理学科	11	15.9
不明		4	5.8
合　計		69	100

〔学年別集計〕

学　年	登録数	%
1	16	23.2
2	15	21.7
3	18	26.1
4	16	23.2
科目等履修生	0	0.0
不明	4	5.8
合　計	69	100

３）2004 年度バリアフリー委員会学生組織構成（支援利用学生含む）

〔学部別集計〕

学　部	学　科	登録数	%
商学部第一部	商学科	5	6.6
経済学部	経済学科	1	1.3
法学部	法律学科	9	11.8
社会情報学部	社会情報学科	25	32.9
人文学部	人間科学科	20	26.3
	英語英米文学科	6	7.9
	臨床心理学科	10	13.2
合　計		76	100

〔学年別集計〕

学　年	登録数	%
1	23	30.3
2	19	25.0
3	19	25.0
4	15	19.7
科目等履修生	0	0.0
合　計	76	100

４）2005 年度バリアフリー委員会学生組織構成（支援利用学生含む）

〔学部別集計〕

学　部	学　科	登録数	%
商学部第一部	商学科	6	5.4
経済学部	経済学科	5	4.5
法学部	法律学科	17	15.3
社会情報学部	社会情報学科	19	17.1
人文学部	人間科学科	41	36.9
	英語英米文学科	10	9.0
	臨床心理学科	12	10.8
	科目等履修	1	0.9
合　計		111	100

〔学年別集計〕

学　年	登録数	%
1	35	31.5
2	35	31.5
3	27	24.3
4	13	11.7
科目等履修生	1	0.9
合　計	111	100

５）2006 年度バリアフリー委員会学生組織構成（支援利用学生含む）

〔学部別集計〕

学　部	学　科	登録数	%
商学部第一部	商学科	7	5.9
経済学部	経済学科	2	1.7
法学部	法律学科	12	10.1
社会情報学部	社会情報学科	23	19.3
人文学部	人間科学科	28	23.5
	英語英米文学科	10	8.4
	臨床心理学科	11	9.2
	こども発達学科	26	21.8
合　計		119	100

〔学年別集計〕

学　年	登録数	%
1	45	37.8
2	29	24.4
3	25	21.0
4	19	16.0
科目等履修生	1	0.8
合　計	119	100

６）2007 年度バリアフリー委員会学生組織構成（支援利用学生含む）

〔学部別集計〕

学　部	学　科	登録数	%
商学部第一部	商学科	4	3.3
経済学部	経済学科	3	2.5
法学部	法律学科	11	9.1
社会情報学部	社会情報学科	23	19.0
人文学部	人間科学科	28	23.1
	英語英米文学科	9	7.4
	臨床心理学科	13	10.7
	こども発達学科	30	24.8
合　計		121	100

〔学年別集計〕

学　年	登録数	%
1	41	33.9
2	31	25.6
3	26	21.5
4	23	19.0
科目等履修生	0	0.0
合　計	121	100

７）2008 年度バリアフリー委員会学生組織構成（支援利用学生含む）

〔学部別集計〕

学　部	学　科	登録数	%
商学部第一部	商学科	0	0.0
経済学部	経済学科	4	3.3
法学部	法律学科	9	7.3
社会情報学部	社会情報学科	12	9.8
人文学部	人間科学科	39	31.7
	英語英米文学科	9	7.3
	臨床心理学科	20	16.3
	こども発達学科	30	24.4
合　計		123	100

〔学年別集計〕

学　年	登録数	%
1	37	30.1
2	25	20.3
3	42	34.1
4	19	15.4
科目等履修生	0	0.0
合　計	123	100

８）2009 年度バリアフリー委員会学生組織構成（支援利用学生含む）

〔学部別集計〕

学　部	学　科	登録数	%
経営学部	経営学科	3	2.5
	会計ﾌｧｲﾅﾝｼｬﾙ科	1	0.8
経済学部	経済学科	8	6.7
法学部	法律学科	16	13.3
社会情報学部	社会情報学科	11	9.2
人文学部	人間科学科	36	30.0
	英語英米文学科	4	3.3
	臨床心理学科	15	12.5
	こども発達学科	26	21.7
合　計		120	100

〔学年別集計〕

学　年	登録数	%
1	30	25.0
2	36	30.0
3	29	24.2
4	25	20.8
科目等履修生	0	0.0
合　計	120	100

資料２　支援状況

１）2002 年度～2009 年度のテイカー配置状況

年度	学期	障がいの内容	支　援　内　容	被支援 学生数	支援 科目数	支援 学生実数	配置学生 総数★
2002	前期	聴覚	ノートテイクまたは PC 要約筆記	難聴 2	24	29	62
	後期	聴覚	ノートテイクまたは PC 要約筆記	難聴 2	16	29	47
2003	前期	聴覚	ノートテイクまたは PC 要約筆記	難聴 1	不明	40	不明
	後期	聴覚	ノートテイクまたは PC 要約筆記	難聴 1	16	37	不明
2004	前期	聴覚, 上肢機能	ノートテイクまたは PC 要約筆記，筆記代行	難聴 5 筆代 2	31	64	70
	後期	聴覚, 上肢機能	ノートテイクまたは PC 要約筆記，筆記代行	難聴 4 筆代 2	25	33	58
2005	前期	聴覚（弱視含） 上肢機能	ノートテイクまたは PC 要約筆記，筆記代行	難聴 7 弱視・難聴 1 筆代 1	50	52	133
	後期	聴覚（弱視含） 上肢機能	ノートテイクまたは PC 要約筆記，筆記代行	難聴 7 弱視・難聴 1 筆代 1	46	44	103
2006	前期	聴覚（弱視含）	ノートテイクまたは PC 要約筆記	難聴 7 弱視・難聴 1	76	70	221
	後期	聴覚（弱視含）	ノートテイクまたは PC 要約筆記	難聴 7 弱視・難聴 1	82	65	171
2007	前期	聴覚 上肢機能	ノートテイクまたは PC 要約筆記，筆記代行	難聴 8 筆代 1	71	69	195
	後期	聴覚 上肢機能	ノートテイクまたは PC 要約筆記，筆記代行	難聴 8 筆代 1	55	50	145
2008	前期	聴覚	ノートテイクまたは PC 要約筆記	難聴 8	65	50	168
	後期	聴覚	ノートテイクまたは PC 要約筆記	難聴 8	55	43	141
2009	前期	聴覚	ノートテイクまたは PC 要約筆記	難聴 7	61	45	145
	後期	聴覚	ノートテイクまたは PC 要約筆記	難聴 7	59	46	148

2005～2007 年度は上肢障がい学生の筆記代行（１名配置）も上記数字に含まれている．2008 年度以降は別に集計している．

★配置学生総数（テイクには１科目２名で入るが，補充要員を含め２～３名配置している，複数科目配置学生在り）

２）2008 年度以降の移動介助および筆記代行の配置状況

年度	学期	種　　別	利用学生数	支援学生実数
2008		通学・移動介助	4	25
2009	前期	通学・移動介助	2	28
		筆記代行	1	20
	後期	通学・移動介助	2	26
		筆記代行	3	25

2008 年度は通年データのみ．

資料 3　2002 年度からの大学予算

年度	予算額(円)	執行額(円)	備考（執行額：円）
2002	1,030,000	808,537	ノートテイカー･PC テイカー奨励金（図書券）655,000，消耗品 11,787，パソコン 141,750
2003	630,000	800,925	ノートテイカー・PC テイカー奨励金 536,000，消耗品 15,172，パソコン 249,753
2004	788,000	1,232,420	ノートテイカー･PC テイカー奨励金 1,005,000，消耗品 59,976，学外講師謝礼 14,444，聾関連大会参加費 153,000
2005	2,035,000	2,949,381	ノートテイカー･PC テイカー奨励金 1,789,000，消耗品 58,571，情報宣伝費 8,800，書籍･ビデオ購入費 48,000，学外講師謝礼 133,333，聾関連大会参加費 405,220，要約筆記講師謝礼 58,000，聾唖者講演会 152,200，ノートパソコン購入費 296,257
2006	1,812,000	3,296,602	ノートテイカー･PC テイカー奨励金 2,724,000，消耗品 49,617，情報宣伝費 35,019，学外講師謝礼 159,997，聾関連大会参加費 233,500，プリンター 18,799，PC バック 5,670，PC 修理費 70,000
2007	4,641,000	3,511,713	ノートテイカー・PC テイカー謝金 2,672,760，消耗品 65,405，情報宣伝費 26,400，書籍･ビデオ購入費 19,969，学外講師謝礼 142,221，聾関連大会参加費 267,000，障がい者スポーツ交流 5,090，PC 修理費 105,535
2008	4,240,000	3,612,796	ノートテイカー・PC テイカー謝金 3,145,455，消耗品 59,546，情報宣伝費 29,800，聾関連大会参加費 201,740，PC 消耗品 22,367，学外講師謝礼 153,888